
地下迷宮の怪物

雨宮雨彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地下迷宮の怪物

【Nコード】

N2546H

【作者名】

雨宮雨彦

【あらすじ】

地下へ通じる流れの強い下水道に、洋一はあやまって家の鍵を落としてしまいました。けど不思議なことに、それがいつの間にか家へ届けられていたのです。

洋一がその奇妙な出来事を経験したのは、雨が降っている日のことでした。学校帰りに電車を降りて道を歩きながら、首からかけていた家の鍵をもてあそんでいたのですが、何かの拍子にそのヒモが切れて洋一の手を離れ、鍵はあつという間に地面へと落ちていったのです。でもその下はコンクリートでも石畳でもなく、なんと下水道の入口が口を開いており、鉄でできたフタが置いてあるだけだったのです。金網のような形のフタですから当然すきまがたくさんあり、小さな鍵など簡単に通り抜けることができるでしょう。本当の話、鉄でできた金網の部分になど触れもせず、鍵が下水へと落ちていくのを洋一は見送ることになりました。

雨のせいで流量が増え、黒い水がごうごうと流れているのが見えます。その中へ落ち、鍵はもちろん一瞬で見えなくなってしまいました。

下水へ下りていつて鍵を探すことなど問題外でした。あそこは深く水かさがあり、洋一の小さな体など一瞬で押し流してしまうほど流れも強いに違いありません。鍵はもう何百メートルも流されてしまっているでしょう。それに第一、洋一の力では鉄のフタを持ち上げることだつてできません。

大きなため息をつき、洋一はとぼとぼと歩き始めるしかありませんでした。居間のタンスの引き出しの中に予備の鍵があることは知っていました。だから鍵をなくしたといって、両親から強くしかられることはないでしょう。でも今日は両親が留守だから、帰っても洋一は家の中に入ることができないのです。この雨の中、お姉さんが女学校から帰ってくるのを2時間以上も待たなくてはならないの

です。

鍵をなくしてしまったというニュースを最初に打ち明けなくてはならない相手がお姉さんだということで、洋一はさらに気が重くなりました。お姉さんは少し年が離れていて、やさしくないことはないので、なんでもかんでも力ツチリとこなす性格の人で、洋一の話の聞いてあきれて、きつと鼻を鳴らすに違いなかったからです。

それでも洋一は家に向かって歩き続けなくてはなりませんでした。学校帰りに寄り道することは両親と先生たちのどちらからも禁止され、許されてはいませんでした。カバンを置くまでは、洋一は駄菓子屋へ行くどころか、本屋さんで立ち読みをすることだつてできなかったのです。

玄関の軒下で二時間、雨の音を聞きながらぼんやりとすごさなくてはならないと覚悟をして、洋一は家の前までやってきたのですが、そこではちよつとした驚きが待っていました。洋一の家はあの時代では珍しい洋風の建物で、正面のドアなども映画に出てくるような木製の分厚いものだったのですが、そのノブに小さな品物がヒモで引っかけられ、ぶら下がっていることに気がついたのです。思わず駆け寄り、手にとつて、洋一はあつと小さな声を上げるようになりました。それはなんと、ついさつき下水の中に落としてしまったはずの鍵だったのです。

なんだか信じられないような気持ちで眺め、手の中で何度もひっくり返してみました。形や色、あちこちにある小さな傷までが記憶にあるのとまったく同じであることは、洋一もすぐに認めざるをえなくなりました。ヒモが切れた部分は誰かの手で結びなおされています。水中から引き上げられたものであることも間違いない、全体がしつとりとぬれ、まだしずくまでたれているではありませんか。

誰が届けてくれたのだろうと洋一はキョロキョロしましたが、誰の姿も目に入りませんでした。しとしと降る雨の中、植木や花壇が並んでいるいつもの庭の風景が広がっているだけだったのです。

でもとにかく、洋一はスムーズに家の中に入ることができたわけです。ぶうぶう言われながらお母さんに予備の鍵を出してもらったこととも、フンと鳴るお姉さんの鼻の音を聞くこともなかったわけです。すぐに台所へ行って、戸棚の中にあつたビスケットを何枚か取り出し、自分の部屋へ行ってイスに腰かけ、昨日買ってきたばかりで読むのを楽しみにしていた漫画雑誌を机の上に広げたのですが、洋一の目はコマもセリフも一つも追ってはいませんでした。ぐるりとカーブを描いて空を飛ぶツバメのようにして、洋一の思いはすぐに同じ場所へと戻ってくるのでした。「いったい誰があのか鍵を届けてくれたのだろう」

どこのどういう人であればあの下水の中で鍵を見つけ出し、拾い上げ、持ち主の家を探し出し、まっすぐ帰宅した洋一よりも先に玄関のノブにかけておくことができるのか、さっぱり見当がつかないのです。考えれば考えるほど、洋一の頭は混乱するばかりでした。しばらくの間、頭を悩ませ続けたのですが、あれがどういう意味を持つ行為であれ、親切の一種であることは間違いなさだろうという結論に達したのです。ならばお礼を言わなくてはなりません。

でも、どうやって？ どこにいる誰ともわからない人に対して、どうすれば「ありがとう」を伝えることができるというのでしょうか。

そのことに洋一は頭をしばったのですが、やがて答えを出すことができました。そして準備に取りかかったのです。まず洋一は、適当なガラスびんを探すところから始めました。きちんとフタができ

て中に水が入らないことと、その大きさが問題でした。下水道をおおう金網を通して、水の中へ落とすことができなくてはならないのです。

いろいろ探して、お母さんが使っている香水の小ビンがちょうどいいということがわかりました。うまい具合に中身を使いきったところだったので、簡単にもらい受けることができました。これをきれいに洗い、きちんと乾かしてから手紙を入れて、下水道に流すのです。

洋一は手紙を書き上げました。小さなビンの中に入れるのだから、あまりたくさんのは書けませんでした。

鍵を届けてくれて本当にありがとう。

感謝しています。

お礼に僕にできることがあれば、いつでも言うてください。
かしこ。

この手紙を小さく折りたたんでビンの中に入れ、フタをしつかりと閉めたのです。手紙が下水へ『投函』されたのは、翌日の学校帰りのことでした。雨はやんでしまったので水かさは減っていました。が、下水道の中はやはり暗く、ビンはさっと押し流され、どこかへ見えなくなっていました。洋一は満足そうに微笑むことができました。もちろん返事など期待していませんでしたが、親切にしてくれたことへのお礼をのべ、すべて終わったつもりでいたのです。この出来事に続きがあることなど、彼は夢にも知らなかったのです。

その日もやはり雨が降っていました。日曜日だったけれど、両親

とお姉さんは朝から留守をして、家の中にいるのは洋一ひとりでした。この雨では遊びに行く気にも外へ出る気にもならなくて、部屋の中でごろごろしていました。家の中にある漫画の本は読みつくしてしまっていました。ため息をつき、畳の上に置いてあるのがたま目に付いた一冊に手を伸ばしかけたのですが、それももうとつくに読み終えてしまっていることに気づき、洋一はため息をつきました。でも家の裏手あたりでゴトンという大きな音が突然聞こえてきたのは、そのときのことだったのです。ひどく驚いて、洋一は思わずびくりとすることになりました。

体をこわばらせ、洋一は耳をすませましたが、それ以上は何も聞こえてきません。空耳だったのかという気もしましたが、やはり誰かがいるに違いないと思って、目で見てちゃんと確かめるまでは安心できそうにありません。だから音を立てないように、洋一はゆっくりと立ち上がったのです。廊下に出て、足音を忍ばせて歩き始めたのです。

大きな家ではないので、台所にはすぐに着くことができました。電灯が消えているので薄暗く、ぬれた窓ガラスには雨の粒が張り付いています。台所の床に足跡を見つけたとき、洋一はもう少しであつと声を上げてしまふところでした。

ぬれた足跡で、靴も脱がずに誰かがここを歩いたに違いありません。ぬれているのは外の雨水のせいでしょう。その足跡が長靴によつてできたものらしいと気づき、洋一は首をかしげることになりました。こんなことをしそうな人など見当がつかなかったからです。

洋一は顔を近づけて眺めました。長靴は長靴でも、少しサイズの小さい子供用のようです。家の裏手に面した勝手口から入り込み、台所の中を一周し、そのときイスの一つに触れて思わぬ大きな音を

立ててしまったのでしよう。だからあわてて出ていったのです。そういえば、勝手口のドアもわずかに開いたままになっているではありませんか。急いで靴を取りに行き、洋一があとを追いつめたのはいうまでもありません。

雨はもう上がっていたので、傘を持って出る必要はありませんでした。勝手口を出ると、土の上にくつかの足跡を見つけることができました。もちろん子供用の小さな長靴のあとです。正体はわからないけれど、その人が庭を通って出ていったことはたしかでした。足のサイズの割に歩幅が大きく、駆けていったのかもしれない。でもやはりあわてていたのか、あることに気がついて、洋一はにんまりと笑うことになりました。走るのに夢中で前をよく見ていなかったのか、庭のキンモクセイの木にぶつかったらしい跡があったのです。

この時期、キンモクセイの花は満開で、庭中に甘ったるい匂いをまき散らしていました。だから侵入者の体には、オレンジ色をした小さな花びらが無数にくつついたに違いありません。今はやんだといっても、さっきまでのあの大雨だし、台所の床に落ちていた水の量から見ても、侵入者がびしょぬれだったことは間違いないからです。

庭を抜け、侵入者はそのまま道へ出ていったようでした。洋一の家裏手からは細く薄暗い路地が伸びていました。体を揺らして駆けていきながら少しずつ落としていったキンモクセイの花びらが道しるべになりました。それを追って、洋一は歩き始めたのです。

長い旅になるとは思えませんでした。そしてそれは正しかったわけですが、近距離でなければ侵入者の体からはすべての花びらが落ちてしまい、洋一は道しるべを失ってしまったことでしょう。でも

ほんの五分ほどで目的地に達することができたのです。

意外な場所だったので、洋一は口をぽかんと開けることになりました。彼の家の近くには汚れた水の流れるドブ川があり、それがあつた場所からは地下にもぐつて下水道となるのですが、キンモクセイの花びらはちょうどその入口まで続いていたのです。侵入者は、明らかにここから下水の中へと入つていったのです。灰色のコンクリートでできたトンネルのような形の穴が大きく口を開けています。入つていこうかどうかと、洋一は頭を悩ませることになりました。ドブ川の水は普段よりも少し多いようですが、もう雨は上がつていて、水かさが増えることはないだろうと、洋一は考えることにしたのでした。

もちろん懐中電灯も持たないままで、真つ暗な地下へと下りてゆく気があつたわけではありません。ただドブ川の川原に下りて、トンネルの中を少しのぞきこんでみるだけのつもりでいたのです。

でも洋一は知らなかったのです。川の水位と水かさは、今この場所まで降っている雨の量や強さとは必ずしも関係がないのです。当たり前のことですが、川は川上から川下へと流れています。たとえ川下で一滴の雨も降っていなくても、川上で降った雨が川に流れ込み、水位を一気に押し上げることがあります。このとき洋一の身に起こつたのも、それとまったく同じ現象でした。トンネルの中に頭を突っ込み、何かないか、誰かの姿が見えないかと目をこらしていました。川の上流で突然大雨が降り始め、深さ１メートルを超えるだけ流がすぐ背後に迫っていることなど、洋一はまったく知らなかったのです。

だから茶色い水の流れに予告もなく飲み込まれ、押し流され始めたときにも、自分の身に何が起こっているのか、洋一にはさっぱり

理解できませんでした。強い流れに背中を押され、トンネルの中へと一気に放り込まれ、まわりは突然真っ暗になってしまいました。何も見えず、ごうごうという水音以外は何も聞こえません。洋一は悲鳴を上げていたに違いありませんが、それだって本人の耳に聞き取ることができないほどだったのです。めったやたらと手足を動かして暴れ、運良く顔だけは水の上に出すことができました。

でも水の流れは嵐の海のように荒く、洋一を絶えず左右に引きずり回し、上下さかさまにひっくり返そうとし、ときにはトンネルの壁にいやというほどぶつけ、切り傷やすり傷だけでなく、とうとうタンコブまで手に入れることになりました。でもその衝撃が強すぎたのでしょう。洋一は気を失い、何もわからなくなってしまったのです。

水は、トンネルの中を相変わらずかなりのスピードで流れ続けています。気を失って手足を動かすこともなく、まるで人形のように洋一はその中を流されていったのでした。

どのくらいの間、気を失っていたのか、洋一には見当もつきませんでした。ただわかつているのは、固い床の上におおむけに横たわっていて、その床は冷たく、感触からしてびしょぬれであるように感じられるのに、でも彼の体はぬれてはおらず、特に寒さを感じているわけでもないということだけでした。

洋一はもう完全に意識を取り戻していました。自分が明るい場所にいるということは、まぶたを通して差し込んでくる光でわかっていました。でも目を開けると何が見えるのか怖くて、まだまぶたを開くことができないでした。このときもし洋一の顔を眺めている人がいたなら、明らかに目を覚ましているにもかかわらず難しい顔をして額にしわを寄せ、開こうか開くまいか心を決めかねてま

ぶたをぴくぴくさせている様子を見て、「この子供はいつたい何をしているのだろう?」といぶかしんだに違いありません。

でも、いつまでもそうしてはいられません。勇気を振りしぼって、とうとう洋一はまぶたを開いたのです。

最初に目に付いたのは、まわりを満たしている光がなぜか黄色く感じられていたのは不思議でもなんでもなく、いくつか灯っている石油ランプのせいであるということでした。鼻を刺激しているのが石油が燃える匂いであるということも、同時に納得することができました。ざあざあという水音が聞こえていますが、体を起こしてキョロキョロすると、すぐそばを水が流れているのを見ることができました。川や水路のような大きな流れではなく、道路の脇にあるちよつとした溝程度のものでした。

まわりはすべてコンクリートできていて、見上げると天井が丸いアーチ型を描いていることがわかります。それが前後に長くずつとどこまでも続いているので、まるで大きなパイプの中に座り込んでいるような気持ちになります。これは下水道だとすぐに気がつくことができました。どうやらあの強い水流のせいで、下水の奥の奥まで押し流されてきてしまったようでした。

東京は大きな町です。東洋一というだけでなく、世界でも最大の人口を持つ町だということは、洋一も学校の社会の時間に習ったことがありました。都心だけでなくまわりの郊外まで含めれば、面積も相当なものです。その町の地下にまるでクモの巣かアミの目のようにして下水道が作られているということも洋一は知っていました。明治の初めから建設が始まったわけですから、今ではその長さは想像を超えたものであることでしょう。

家へ帰る方法など、もちろん洋一にはわかりませんでした。でもそのことで不安になることはありませんでした。だけどそれは彼が楽天的な性格の持ち主だったからではなく、もっと別のことに気がついたせいでそんな不安を感じている余裕などなくなったからだといふべきでしょう。彼がいたのは、下水道の途中でなぜか部屋のように一ヶ所だけ広くなった場所だったのですが、そこに洋一は一人ではなかったのです。

洋一が見回すと、もちろん人々も見つめ返してきました。これまでに見たこともない人々で、十数人いるようですが、顔の向きを変えたり振り返ったりして洋一を見つめるのです。黒い服を着て、薄暗い中でシルエットのような姿なのですが男女が混じり、子供の姿もいくつかあるようです。石油ランプは床に置かれ、そのまわりに集まって会議か話し合いでもしていたような雰囲気です。

奇妙なのは、全員が同じ服装をしていることでした。体をすっばりとおおう黒い大きな雨ガッパなのですが、ひどく分厚く頑丈そうで、頭にかぶるしっかりしたずきんまでついているのです。こんな場所だから当然ですが、表面はぬれて光っています。

自分もいつの間にか同じ雨ガッパを着せられていることに気づき、洋一は少し驚きました。だからぬれた床に横たわっていても平気だったのでしょう。雨ガッパの下にも知らないうちに乾いた服を着せられていることに気がついて、もう一度びっくりしました。

立ち上がろうとして、洋一はもう一つ発見をすることになりました。彼は足に長靴をはいていたのです。家を出るときには、たしかに普通の運動靴をはいていましたから、これも気を失っている間に誰かがはきかえさせてくれたに違いありません。

立ち上がった、洋一は人々を見回し続けました。口からはどんな言葉も出てこなくて、それは人々の側も同じようで、みな口を閉じて黙ったままでいます。ザアザアという水音だけが部屋の中に聞こえています。でも突然、ピチャピチャという軽い足音がそこに混じったので、洋一は思わず振り返ることになりました。足音は背後から近寄ってきたからです。

彼の目に入ったのは、自分と同年ぐらいの女の子でした。もちろん他の人たちと同じように雨ガッパを身につけ、足には長靴をはいています。雨ガッパのずきんの下には白い顔が見えていました。瞳の色は濃く、眉毛もはつきりした黒い色をしているのですが、肌の色が本当に白いのです。こんな地底に住んで日の光に当たることが少ないのであれば、当然かもしれません。

口をぽかんと開けたまま洋一は相手を見つめることになりましたが、彼女はそのままだんどん近寄ってくるではありませんか。彼女との距離が縮まるにつれ、そのまつげの長さが目に付くようになりました。まるで南の島のヤシの葉のように長く、彼女の目を守っているのです。こんな場所だから空気中をつねに湿気が舞い、まつげの上に集まって水玉を作るのですが、それがまるで涙をためている姿のように見えることに洋一は気がつきました。

「舞子ちゃん、その子は大丈夫だから安心おし」

誰かの声が聞こえたので振り返ると、口を開いたのは中年の男だったようです。この男はバケツをひとつ足元に置き、その中には何かが入っているようでしたが、それが何なのかは洋一がいる場所からは見ることができませんでした。

「うん」女の子が返事をしました。このとき彼女が少し体を動かし

たので、一瞬ですが洋一は見る事ができました。ボタンがゆるめられていた雨ガッパの前が少しはだけ、彼女の洋服の胸のあたりが見えたのです。そこにはまるで首飾りのようにして、ヒモに結ばれた小さなガラスびんがあつたのです。透き通つて、折りたたまれた小さな紙が内部に入っていることもわかります。先日、洋一が下水道に落としたあのビンだったことはいうまでもありません。

「それで舞子ちゃん、様子はとうだったね？」一人の女が声をかけました。舞子は女がいる方向を振り返ります。

「うん、壁のヒビはかなり大きくなっていたわ。もういつ崩壊が始まつても不思議はないと思う」

「それは困つたねえ」

その思いは他の人々も同じだったようで、部屋の中は一瞬で静かになってしまいました。口を閉じて、もう誰も何も言わないのです。流れる水の音以外は何も聞こえません。

「いったい何の話なの？」2、3回キョロキョロし、とうとう洋一は口を開く氣になりました。

「地上の人々はまったく知らず、氣にもかけていないことだろうが……」突然おじいさんが話し始めたので、洋一はそちらを向きました。固まって座っている人々の真ん中あたりにいる人なので、洋一からもよく見えるように数人が座りなおし、道を開けてくれました。

「まるでサルみたいなおじいさんだ」というのが、この人を見て洋一が最初に持った印象でした。このおじいさんはそれほど小柄で、顔はしわだらけで、しかも肌の色は赤く、雨ガッパのそでの先から

は体に似合わない大きさの、でもなぜか丸々と短い指をした手が見えています。この指も、顔と同じように赤っぽい色をしているのでした。体は頑丈そうで、老いばれた感じはしません。ヒゲのせいで年寄りに見えるだけで、実はまだまだ若いのもかもしれません。このおじいさんが話し続けました。それが意外な話題だったので、洋一は目を丸くすることになりました。

「製鉄所や造船所、石油化学工場などすべて合わせると、この東京には工場が全部でいったいいくつ存在するのか、考えてみたことはあるかね？」

「さあ？」と洋一は首をかしげるほかありませんでした。

「きつと何千という数だろうな。そういう工場にはみな井戸があり、地下水をくみ上げて使っておる」

「どうして？ 水道はないの？」

洋一を見つめ返し、おじいさんはかすかに笑いました。「水道の水など使わんよ。水道代がかかるじゃないか。地下水ならいくら使ってもタダだがね」

「あんたはいつたい誰なの？」

「この人はね」会話に割り込んで、舞子が教えてくれました。「下田先生といって、大学の偉い学者なのよ」

「へえ」

「そんなに偉くはないさ。それでその地下水だが…」笑いながら下

田先生は続けます。「さまざまな工場が、平気な顔で毎日毎日何百トンとくみ上げている。東京のすべての工場を合わせると、一日に何千トンという量だろうね」

「それがどうかしたの？」話がどっちへ行こうとしているのか、洋一にはさっぱり見当が付きません。

「君の名はなんというのかね？」

「洋一」

「では洋一君、君は夏にスイカを食べるのは好きかい？」

「うん」

「じゃあここにスイカが一つあるとしよう。丸くて大きくて、緑色の模様のはつきりしたとてもおいしそうなやつだ」

「うん」洋一はうなずきます。

「君はこのスイカを食べるのをとても楽しみにしている。だが意地悪な人がいて、君が舌なめずりをしてスイカを切る前に、こんなに大きな注射器をスイカに突き刺して……」下田先生は手で大きさをやってみせました。大人の腕の長さほどもある注射器です。そんなものが自分の腕に突き刺される場面を思わず想像して、洋一はぞっとするを感じないではいられませんでした。でも洋一を怖がらせるつもりはまったくなく、下田先生はにこやかに話しつつげます。

「この注射器の太くて長い針をスイカに突き刺して……」

「痛い薬を注射するの？」自分でも思いがけず、とうとう洋一は口を開いてしまいました。彼の頭の中には、先日、病気の予防注射を受けたときの記憶がよみがえっていました。

「いや、その逆だよ」下田先生は首を横に振りました。「この注射器を使って、スイカの中身を外に吸い出してしまっんだ。強力なポンプのようにしてね。大きな注射器だから、スイカの汁を全部吸い出してしまうことができる。そうしたらスイカはどうなるね？」

天井を見上げ、洋一は想像力を働かせようと思いました。「小さくしぼんで、しわくちゃになっちゃっう」

満足そうに下田先生はうなずきました。「そう、それがいま東京の町に起ころうとしていることなんだよ」

「どうということなの？」

「君は、東京の真下には巨大な地底湖があるという話を聞いたことはないかね？」

「地底湖？ 湖のこと？」

「そうさ。地質学者の間では以前から予想されていたことだよ。予想というよりも、私は存在を確信しておったがね」

「どうして？」

「大規模なものやごく小さなものまで含めて、ありとあらゆる地震のデータを集めてみると、東京の地下には風船のようにふわふわし

た巨大な物体が存在するとしか考えられないからだよ。だとしたら、これはもう水の塊しかありえないではないか」

「どのくらい巨大なの？」

あきらめたような表情で、下田先生は首を左右に振りました。「それがなんと、直径10キロほどもあるのだよ。地上からは想像もつかないことだが、東京の町とは実はこの湖に浮いている島に過ぎないのさ」

「へえ」鼻の穴を大きくして、洋一は息を吸い込みました。彼の知っている東京の町、住宅街や背の高いビル街、港や海のそばの工場街までそのすべてが、住んだり働いたりしている一千万の人々を乗せて、本当は湖にぶかぶかと浮いているだけだということです。それはもちろん洋一のお父さんやお母さん、女学校へ行っているお姉さんも含んでいます。頭の中がすうつと冷えていくようななんともいえない気持ちを洋一は味わうことになりました。

「ふうつ」ため息のような息を洋一はつくことになりました。

「でも東京中の工場は、今もその湖の水をどんどん吸い上げ続けているのよ」舞子が言いました。

「どうして？ くみ上げているのは地下水じゃないの？」

首を横に振り、下田先生が答えました。「地上の人々は地下水だと思っているが、本当は知らずに湖の水をくみ上げているのだよ。地下の様子などじかに目で見た人は誰もいないのだからね。東京の町が地下へと崩れ落ちてしまわないのは、この湖の水が下から支えてくれているからなのだがね。地上の人は一人も知らないことさ。

地面を作っている岩とはもちろんとても重いものだが、重さと強さでは水だって負けてはいない。押し返すだけの強さをちゃんと持っているのさ。だがそこで、湖の水が抜き取られてしまったとしたらどうなる？」

洋一は目を丸くしました。「岩の壁が崩れるの？」

「そうだ。そしてその壁が支えていた天井も同時に崩れ落ちるだろう」

「するとどうなるの？」

「決まっているさ。まるで足をすくわれるようにして、東京の町は地底へ向かって一気に崩れ落ちることになる」

それは想像するだけで恐ろしいことでした。町も人も家も道路も、電車や汽車までも、すべてが一瞬で地中にのみこまれてしまうのです。そういう災害が起こっても、おそらく湖の水はまだいくらかは残っていることでしょう。東京の町があつた跡は直径10キロの巨大な穴となり、そのあとを水が埋め、丸い水たまりのようになってしまふでしょう。洋一は思わず体が震えるのを感じないではいられませんでした。

「じゃあ、どうすればいいの？」洋一の声は少し震えていたかもしれませんが、誰も笑ったりしませんでした。だから洋一も、にっこりはできなかつたけれど、再び人々を見回すことができたのです。

「それを今から考えようとしているのさ」下田先生がしめくりました。

「ふうん」

「それはそうと舞子ちゃん」

「はい」舞子が返事をします。

「洋一君をおうちまで送ってあげてくれないかな。早く帰らないとおうちの人が心配するだろう」

舞子はうなずき、洋一の手を引いて歩き始めようとします。彼女の身長が自分と同じくらいであることに洋一は気がつきました。まるで本当に小学校の同級生だといっても通りそうな感じです。

「舞子ちゃん一人で大丈夫かい？」女の人が声をかけました。「一緒に緒に行つてあげようか？」

「ううん、大丈夫」舞子は首を横に振りました。だから二人は歩き続け、人々の姿や話し声は背後に遠くなりましたが、いつの間にか舞子は石油ランプを手にして、それで足元を照らしています。何十メートルか進み、角を二つか三つ曲がって、小さな船着場のような場所に出ることができたとき、洋一は驚いて目を丸くしました。地下にこんなものがあるなんて、空想したことなかったからです。トンネルのような廊下が終わり、二人は水ぎわに立っていました。

もちろん地下を流れる下水の川です。それでも川幅は10メートルぐらいあるでしょう。そこに小さなボートが浮かべてありました。エンジンがついているようなものでも大きなものでもなく、人が二人か三人しか乗れない小さなものです。こぐための短いオールが二本あるのも見えます。「これに乗るの？」洋一は口を開きました。

「ええ」舞子はうなずき、もう石油ランプをボートのへさきに引っかけ、固定しようとしています。

二人で乗り込み、舞子がオールを取って岸を離れ、ボートがゆつくりと動き始めるとすぐに気がついたことですが、幅のわりにトンネルの高さはあまりありません。立ち上がった手が届くほどではないけれど、丸い天井がすぐ近くに感じられます。コンクリートではなく赤いレンガで作ってあるのが古めかしい感じで、かなり昔の時代、もしかしたら明治に作られたものかもしれません。水はにごっています。泡立ってはならず、それほどひどい匂いもありませんでした。

ボートのへさきにあるランプ以外はもちろん真っ暗で、10メートルも離れるとその先には何があるのかないのか、トンネルが続いているのか、それとも壁があって行き止まりになっているのかもわからず、もしかしたら何もなくて、滝のようになってボートごとどこかへ落ちていってしまうのかもしれないという気までしないでもないのですが、舞子は平気な顔でボートをあやつっています。だから洋一も、あまり怖がっている顔は見せないことにしました。

「君はいつたい誰なの？」トンネルを眺めるのをやめ、洋一は舞子のほうを向きました。ランプの光しかないのでわかりにくいけれど、よく見るととてもきれいな女の子のようです。ずきんをどけてもつと顔を見せてほしかったけれど、ときどき水がポタンと天井から落ちてくるので、頼まないことにしました。

「私はここで生まれたのよ」オールを動かしながら舞子は答えました。

「ここ？ この下水道の中で？」洋一は目を丸くしていたに違いあ

りません。舞子がうなずきます。

「下田先生は違っけれど、さっきの人たちはみんな私の親戚なの。おじいさんやおばあさん、叔父さん、伯母さん、お父さんにお母さんね。いとこたちもいるわ」

「どうして？」

「私たちの一族は、ずっとこの地下で暮らしてきたのよ」

「下水道で？ どうして？」

「ここが私たちのふるさとなのよ」

「なぜ？」

「何十年も昔から、私たちはここで生活してきたの。明治時代からずっとよ。下水の中は冬も暖かく、夏は涼しく、地上の世界と同じくらい広くもあるわ」

「何を食べて生きているの？」

洋一を見つめ返し、舞子にはっこりしました。「私たちだって、ネズミやコウモリを食べているわけじゃないのよ。地上の人々がお金や銀のスプーン、宝石といったものを誤って下水に落としてしまうことがあるでしょう？ 私たちはそれを集めているのよ」

洋一は思わず大きな声を出してしまいました。「だから僕が落とした鍵もすぐに見つけてくれたんだね」

「顔を見かけたことがあったから、君の家は前から知っていたわ。下水道は地上の道路のようになくね曲がったり、うかいしたりなくて、いつもまっすぐに進んでいるの。だから私は君よりも先に家に着き、鍵をドアにひっかけておくことができたのよ」

「でも、なぜ僕の家を知っていたの？」洋一がこう言うと、舞子は黙ってしまいました。下を向き、少し恥ずかしそうにしているではありませんか。

「どうしたの？」洋一は声をかけました。

「毎日学校へ行くために、君はおうちから駅まで道を歩いているでしょう？」

「うん」

「その道路の下をずっと下水道が走っているわ」

「歩道の上に鉄格子のフタがずらりと並んでいるよね」と洋一は無邪気に言ったのですが、その次に舞子が口にした言葉は、彼をとても驚かせることになりました。

「私は毎日、その鉄格子の下から君を見ていたのよ」

「どうして？」

「だって…」

それっきり舞子は黙ってしまいました。どういっていいかわからなくて、洋一も口を閉じました。舞子はオールをこぐのもやめてし

まっています。トンネルは相変わらず狭いのですが流れがあり、ボートをゆつくりと押しています。暑くも寒くもなく、決して過ごしにくい場所ではありません。チャポンチャポンとやわらかな水音が周囲を満たしています。もし下水でなければ、洋一はたわむれに手をぬらしてみたかもしれません。

小さなため息のようなものをつき、洋一はボートの上でゆったりと座りなおすことができました。この瞬間の洋一は、とても幸福な少年だったとっていいかもしれません。もう何も考えなくても家へ帰りつくことができるに違いないし、変わった場所の住人であるとはいえ、かわいらしい女の子と知り合うことができたのです。しかもその女の子は、洋一のことがとても好きらしいのです。下水の鉄格子ごしに、彼が通りかかるのを毎日こっそりと待ち伏せしていたのですから。

でも洋一が息をつき、ボートのへりに寄りかかっていることができたのも、この瞬間までだったようです。舞子が突然頭を動かし、なんだか緊張した様子で顔を横に向けたのです。もちろん洋一はすぐに気づき、「どうしたの？」と言おうとしました。だけど舞子は軽く手を上げて彼を黙らせました。何かにじっと耳をすませている様子です。洋一も同じようにすることにしました。そして気がついたのです。

今や聞こえているのはやわらかい水音だけではなく、ごくかすかですがその下に何か別の音が混じっているようなのです。音というよりも、響きと呼ぶほうがふさわしいかもしれません。おなかの底にズズズと反響するような感じで、とっさに洋一は地鳴りを連想しました。でもまわりの水は静かで、特に波立っているようには見えません。地震が起こっているのではないようです。地鳴りでないとするば、いったい何なのでしょう。

洋一と舞子は同時に思い当たりました。地下のこんな場所で聞こえてくるのです。地震でも地鳴りでもないとするば、あれは津波のように激しい水の流れが出している音に違いないではありませんか。

あのような水の流れをどう表現したらいいのか、私にもよくわかりません。急流やだく流という言葉では不十分かもしれません。それがボートの背後からどつと襲いかかってきたのです。大して広くもないトンネルの内部で水が押し寄せてくるわけですから、水流というよりも、ピストンによって強く押され、注射器の細い針の中を通り抜ける液体のようというのが、最も近い表現かもしれません。その証拠に、地鳴りのような音の直後に二人が感じたのは、おそらく水に押されてだったでしょうが、まるで台風のように吹き付けてくる強い風だったのです。

もちろん洋一には何をする余裕もありませんでした。伏せて体を低くし、ボートにつかまるのがせいぜいだったのです。そして水はあつという間に二人に襲いかかり、ボートを猛烈に押し始めていました。

まるでジェットコースターに乗っているときのような衝撃だったに違いありません。あるいはエンジンに点火して打ち上げられるときのロケットのような加速だったかもしれません。ドンと前に押されて二人はボートの底に重なり合い、それでも何とか水に落ちてしまふことはなく、互いの力をすべて使ってしがみつきあい、ボートにつかまりつづけたのです。

実をいうとこれまで、洋一は女の子というものにあまり関心がなく、評価もしていませんでした。同級生の女の子たちがたまたまそうだったからかもしれませんが、女の子とは軟弱で泣き虫で力もな

く、いざというときであれ何であれ、大して役に立つものではないと考えていたのです。でもこの日、洋一は考えを改めなくてはならないのかもしれない。ボートが大きくゆすぶられ、しぶきを受けて石油ランプの火が消えてしまう前のごく一瞬のことでしたが、舞子がさつとオールを引っ込め、ボートの側面にロープでしっかりと固定するのが見えたからです。

洋一を驚かせたのは、それだけではありませんでした。どこからロープをもう一本取り出し、舞子は自分と洋一の体を結び付け始めたではありませんか。これもとさには信じることができないほど意外な行為だったわけですが、そうやって動く舞子の白い手を果然と眺めている間に波が襲いかかり、ランプが消え、もう何も見えなくなってしまうたわけでした。

水に押され、ボートはとんでもない加速をはじめていました。スチロールの小さなカケラを海に浮かべるとわかることですが、物体は軽ければ軽いほどよく浮き、波があってもその頂上にちよこんと座るように乗っかってしまい、水中にのまれたりは意外としないものです。かといって、洋一たちが乗るボートの乗り心地がとてもよかったです。というのはありません。前後左右にゆれ、何度かはさかさまにひっくり返りそうになりました。それでも二人の体重が軽く、体を縮めて船底にしがみついていたことが幸いしたのでしょう。ボートは安定を保ち、水が多少は入ってきたものの、転ぶくすることも沈んでしまうこともなかったのです。

もちろん二人は、長い間気を失っていました。ランプが消えてしまっているせいで何も見えないのですが、音の響きで洋一はなんとなく感じることができました。ボートはまだちゃんと浮いていて、静かな水面の中央にいるようです。ゆっくりとただよっているのでしょう。船体がわずかに揺れることでそれがわかるのですが、波も

流れもほとんどないようです。

洋一はついさっき、舞子の手で揺り起こされたところでした。舞子も目を覚ましたばかりだったのでしょう。それでも最初に洋一を気づかせてくれたのです。

目を開いても真っ暗で何も見ることができないので、洋一は呆然としていました。それでも舞子が手を動かし、何かをさかんにやっているらしいのは感じられます。かさこそと小さな音が聞こえてくるのです。

何をしているのだろうと洋一は思いましたが、数秒もたたないうちに理解することができました。石油ランプが再び明るく光を発し始めたのです。ぬれた水をふき取り、マッチを取り出し、舞子が火をつけたのでした。

その光に照らされたものを目にして、口をぽかんと開けるどころか、洋一は思わずあつと声を上げてしまいそうになりました。それは舞子も同じで、ランプをゆっくりと動かして見回しながら、目を大きく見開いています。二人のボートは、巨大な湖の中央に浮かんでいるのでした。

急流に押され、ここまで押し流されてきたのでしょうか。気を失っている間に、滝のように波立つ場所を何度も流れ下り、何百メートルも深い地下までやってきてしまったのかもしれない。大きく開けた場所で、いくら目をこらしても岸边や岩壁らしいものがランプの光の中に浮かび上がることはなく、どのくらい広いのか見当もつきません。水はガラスのように透き通っていますが、深すぎて底など見ることはできません。上を向いても光が届くことはなく、天井を見ることもできませんでした。東京の地下に存在すると下田先生

が言っていた湖にまで落ちてきてしまったのだということに二人が気づいたのは、このときのことでした。

簡単に想像がつくことでしょうが、二人ともボートの上に座り込み、顔を見合わせるようになりました。

「油はまだたくさん残っているわ」ランプの中をのぞきこんで、舞子が言いました。

「これからどうするの?」

どうしていいかわからず、舞子も同じように困った顔をしているに違いないと思いながら顔を上げたのですが、洋一は思いがけず眉にしわを寄せることになりました。舞子の様子が少し変なのです。首を伸ばしてランプを高く持ち上げ、ボートの左手のどこかを眺めているのです。こんな暗闇の中で何を見るものがあるというのでしょうか。

洋一も同じ方向へ顔を向けました。そして気がついたのです。ずっと遠くなので距離はよくわかりませんが、何百メートルか離れているであろう場所に小さなオレンジ色の光が見えていることに気がついたのです。本当にごく小さな点に過ぎず、光源の種類などもちろんわかりませんが、かすかに揺れて見えるところからして、電気の光ではないのかもしれない。

「あれは何の光かしら?」舞子が言いました。

「さあ?」もちろん洋一にもわかるはずはありませんでした。

「とにかく行ってみましょう」ロープをすばやくほどき、舞子がオ

ールをこぎ始めたとき、洋一はとても驚きました。こんなとんでもない場所まで落ちてきてしまつて、何をどうしていいやら途方にくれているときののです。そんなときに、正体のわからない光に向かってボートを進めようというのです。二人はすでに十分危ない目にあつています。もっと危険なものに出会うかもしれない行動を取るなんて、洋一にはまったく理解できませんでした。「やめておこうよ。危ないものかもしれないよ」洋一は舞子の手を押さえようとしてました。

でも舞子はそのままオールを動かし続けました。「危ないかどうかは、そばへ行ってみないとわからないわ」

「悪いやつでもいたらどうするの？」

「地底のこんなに深い場所に」舞子はちらりと洋一を見つめます。「殺人犯や指名手配犯が逃げ込むことなんてないと思う。地上の人がやってくるには深すぎるわ」

「でも…」洋一は不安そうな顔を隠そうとはしません。

「大丈夫よ」舞子にはっこり笑いました。「生まれてから私はずっと地下に住んでいるのよ。ここには怪物も吸血鬼もいないわ。それはよく知っているもの」

ここまで自信たっぷりに言われると、洋一も口を閉じるしかありませんでした。体を縮め、ボートの床に座り続けました。舞子はボートをこぎ続けました。あの光は二人のほぼ真正面に見えています。消えてしまうことなくまだ光を発しつづけ、舞子がボートのへさきに取り付けたランプの光も、あちらからよく見えているに違いありません。

あんな光など消えて、どこかへ行ってしまうばいいと洋一は願っていたが、それは聞き届けられず、ボートが進むにつれゆつくりと大きくなってきました。心臓がときどきし始めるのを洋一はどうすることもできませんでした。もう心臓は時計のようにカチカチと速く打ち、今にも口から飛び出してしまいそうな気がするほどです。

だけど次の瞬間に起こったことは洋一をひどく驚かせ、口から飛び出すどころか、心臓が止まってしまいそうな思いを味わわされることになりました。あの光のあるあたりから不意に声が聞こえてきたのです。

「おい、そこにいるのは誰だ？」

激しい口調なので洋一はぞつとし、逃げ出すために水に飛び込んでしまいたくなりましたがそんなことはできず、ただボートのへりにつかまっているしかありませんでした。手のひらにはびっしりと汗をかいています。暗闇の中から、同じ声がもう一度呼びかけてきました。太い男の声です。「そこにいるのは誰だ、返事をしろ」

突然口を開いて舞子がそれに答えようとしたので、洋一は口をぽかんと開けることになりました。

「その声は下田先生ね。舞子です。洋一君も一緒にいます」

「舞子ちゃんだって？」驚いているのは洋一だけではないようです。下田先生が思わず手を振るわせたので、光の正体はその手の中にある石油ランプなのだとやっと洋一にもわかりました。頬のそばに寄せて顔を見せてくれたので、本当に下田先生だと今度こそ洋一も納得することができました。息をつき、安心感がどつと頭の先からつ

ま先まで走り抜けてゆくを感じることになりました。

「君たちはこんなところで何をしているのだね？」下田先生が言いました。

「先生こそ何をしているんですか？ 私たちは急なだく流に襲われて、ボートごとここまで押し流されてしまったんです」舞子が答えました。

「そこにはボートがあるのかね？」

「ええ」

「それは助かった」

話をしているうちに、二人のボートは下田先生のすぐ近くまでやってきていました。とうとう水面が終わり、ランプの光の中に岸辺が見えてきたときには洋一がどれほどほっとしたか、想像するのは難しくないだろうと思います。体をかがめて下田先生が乗り込んでくる気配を見せたので、洋一は体をずらして場所をあげました。彼は舞子と下田先生の間にはさまれる形になりました。「これからどうしますか？」舞子が口を開きます。

驚いたことに、いつの間に取り出したのか、下田先生は方位磁石を手に行っているではありませんか。指先に乗るような小さなものですが、ちゃんと針がついていて、ある方向を指していることがわかります。こんな地下でも方位磁石はきちんと南北を指すのかと、洋一は少し不思議な気持ちになりました。

「先生は、どうしてこんなところにいるの？」オールを動かし始め

ながら舞子が言いました。

「君たちと同じさ」ふうと息を吐き出し、下田先生は磁石をポケットにしまいました。「下水の中で突然の大水に襲われて、みんな散り散りばらばらになった。君たちも知つていようが、大変な強さの水だった」

「お父さんやお母さんたちはどうなったの？」舞子の顔色が一瞬で変わったのも無理はないでしょう。

でも下田先生は首を横に振るばかりでした。「わからない。だく流は予告もなくやってきて、あつという間に全員がのみ込まれてしまった。ランプの火も一瞬で消えた」

「それで先生一人だけがここまで流されてきたの？」続きは洋一が口にしました。

下田先生はうなずきました。「この湖は東京の地下の一番底にあるんだ。だから君たちも私もここまで流されてきたのだよ。真っ暗な中で、私はうまく湖の岸にはい上がることができた。そして石油ランプに火をつけたところで君たちが気づいてくれたのさ」

「お父さんたちはどうなったと思う？」ボートをこぐのを代わろうと洋一は手を伸ばしかけたのですが舞子は首を振り、言いました。

でも下田先生の答えは「すまない。見当もつかない」でしかありませんでした。

ランプの光だけを頼りに、ボートは湖を進み続けました。さつきまでわずかにあった波は、きつと洋一たちを押し流してきた流れに

よって一時的に作られたものだったのでしょう。今ではもうすっかり消え、水面はしわ一つないガラス板のように平らになっています。ボートが作る波だけがその静けさを乱しながら伝わっていくのです。見たことも想像したこともない景色なので、洋一は少しかり気味悪く感じないではいられませんでした。

「僕たちはどこへ行こうとしているの？」洋一は下田先生を振り返りました。

「舞子ちゃんのお父さんがなぜ私を地下へ呼んだのか、知っているかい？」

「ううん」

「大学の私の研究室にお父さんは姿を見せて、『東京の地下で異変が起こっている』と教えてくれたんだ。だから私は出かけてきた。そして調査を始めようとしていた。だがそこへ雨が降って、まるで桃太郎のお話の桃のようにして、君が押し流されてきたというわけさ」

「へえ」

「だが東京の下水道へやってくるのは、実は私はこれが初めてではなかった。10年前にも一度あったのさ。舞子ちゃんのお父さんはそのときからの知り合いだった」

「どうして？」

下田先生は表情を変え、少し誇らしそうな顔つきになりました。
「この地底湖の存在を私はそのころから確信していたからね」

「地震の研究から予想していたんじゃないの？」

「予想じゃない。存在を確信していた。だから舞子ちゃんのお父さんを雇い、二人で探検を始めたんだ」

「お父さんがまだ若かったころのことなの？」舞子が言いました。

「そうさ。お父さんは東京の地下のことを本当に詳しく知っていたよ。とてもいい道案内人になってくれた。探検に必要な荷物を運ぶ力にもなってくれた」

「たった二人の探検隊だったの？」

洋一がそういうと、下田先生はくすりと笑いました。「そうさ。私の言うことなど、他には誰ひとり信じてくれなかったからね。二人だけでやるしかなかった」

「どんな探検だったの？」

「聞いて面白いようなことは何もなかったさ。深い地底へ向かって2回ほど徒歩調査を行うだけで、地中に開いた巨大な割れ目を私たちは発見することができた。湖の水が減って地層の崩壊が始まり、その影響でできたものだろう。その割れ目への入口が、今は使われていない下水道の途中に開いていたのだよ。ロープを使ってそこをすると降りてゆくだけで、いくらかずくにこの湖を発見することができた。信じられるかい？ この湖は東京の地下たった120メートルのところにあるんだ。地上の人々は誰ひとり知らないことだがね」

「僕はもう知っているよ」洋一は思わず大きな声を出してしまいました。

「そうだね」下田先生はにつこりしました。「湖に岸边を見つければ、私たちはそこにキャンプを作ることにした。本格的な探検を始めるための準備さ。食料や燃料やその他の物資を置いておく場所だよ。地上からボートも運び入れなくてはならなかった。湖をすみずみまで探検して、まず地図を作る必要があったからね」

「それで？」

「だが人は二人しかいないんだ。ばらばらに分解して、背中にかついで運び降ろすことができる特別製のボートが必要になる。しかしこれがなかなか簡単に手に入るものじゃない。だから専門の職人に頼んで、作ってもらうことにした。注文を出して、ボートが完成するまでの2週間がどんなに長く感じられたことか」

「それでボートは完成したのね」今度は舞子が言いました。

「したよ。だが私たちはひどくがっかりすることになった。重いボートをお父さんと二人でかつぎ、再び地底へと降りていったんだ。するとどうだろう。以前湖へ降りてゆくときに使った割れ目がいつの間にか消えてしまっているじゃないか」

「どうして？」洋一は興奮で頬を赤く染めています。

「地下鉄工事のせいさ。新しい地下鉄線路を作る工事が始まっていて、運悪くそれが割れ目のちょうど真上を通っていたんだよ。だから建設機械の重みや振動で割れ目はうずめられ、とつくにふさがってしまっていたんだ」

「私たち、今からそのキャンプへ向かおうとしているのね」舞子が言いました。

「その通りだよ」

「でもそこから先はどうするの？ 地上へ戻る割れ目はもう埋まっているんでしょう？」洋一は不安そうな声を出しました。

「それは行ってから考えるしかないわね。とにかく私はおながすいたわ」

そういつて自分を見つめ、舞子がつこりするので洋一は半分あきれ、半分感心してしまいました。家族の安否も不明で、彼女自身だってここから脱出できるかどうかまだわからないというのに。

だけど地底で生きるというのはこういうことかもしれないと、洋一は思い直すことにしました。生まれた場所も育った環境もまったく違うのです。彼女が洋一と同じ考え方をするとは限らないではありませんか。ボートの右手にある岩にむかって下田先生が目をこらし始めていることに気づき、洋一は口を開きました。「何をしてるの？」

「ああ洋一君、君も探すのを手伝ってくれないかな。私たちがキャンプにしようとした場所がもうそろそろ見えてくると思うんだ」

「大きなキャンプなの？ テントが張ってある？」

「いやいや」下田先生は首を横に振りました。「いくつか木箱が置いてあるだけのちっけなものだよ。目立つように、竹ざおの先に

つけた白い旗を立てておいたが、まだ立っているかな？　とにかくこのあたりのどこか水辺にあるはずだよ。しっかり目を開けて見てくれたまえ」

「水辺？　じゃああれは違うの？」不思議そうな顔で見上げ、10メートルほど離れた場所を洋一は指さしています。でも水の近くではなく、岩の斜面を何メートルも上がった先です。ランプの光が届き、四角い形の白い布がダラリと垂れ下がっているのをかろうじて見ることができました。

「あれは旗よ。そうに違いないわ」舞子が声を上げます。

「そうらしいね」下田先生と洋一もうなずきました。

「しかし、えらく高い場所にあるじゃないか」下田先生は言いました。「もつと水に近い場所だったはずだが。そうか。10年の間に湖の水が減ってしまったのだな」

「地上の人たちがポンプでくみ上げてしまったからだわ」舞子が言いました。「じゃあ、あのそばへボートをつければいいのね。あそこにはいい場所があるわ。洋一君はロープの用意をしてくれる？」

そうやってボートを岸に固定し、三人は上陸することができましたが、洋一は心細そうな声を出しました。「これからどうするの？」

「とにかくキャンプまで行きましょうよ」手を引き、洋一が斜面を登るのを助けてやりながら舞子は明るく言いました。

キャンプ旅行というのは本来楽しいはずのものなのでしょうが、こんなに楽しくないキャンプというのは、洋一は初めて経験するも

のでした。だから彼は沈みがちで、元気を出させるために下田先生は何回も話しかけてやらなくてはならないほどでしたが、対照的だったのは舞子で、そのはしゃぎぶりには下田先生も少し驚くほどだったのです。品物はみんな防水のできるしっかりした箱の中におさめてあったのですがテキパキとふたを開け、舞子は食べ物を用意を始めました。お湯をわかしてお茶までいれてくれたのです。食事をし、横になって少し眠って、先のことはそれから考えることになりました。

予備も含めて毛布は三枚あったので、三人とも暖かく過ごすことができました。波のない湖はほとんど音を立てることがありません。もちろんそれ以外に聞こえる音などありません。120メートル頭上では今も東京の町が騒がしく活動が続けているに違いありませんが、ここまで聞こえてくることはなかったのです。

洋一の耳に入るのは、自分がときどき身じろぎをする音と、下田先生と舞子のおだやかな寝息だけでした。ランプは一つだけつけたままにしてありましたが、そんなものでは光の届きっこない真っ暗な天井を見つめ、長い間寝付けずにいたことはいうまでもないでしょう。でもとうとう洋一も目を閉じ、眠りに落ちていったようでした。

目が覚めるとすぐ、コーヒーのいい匂いが鼻をくすぐることに洋一は気がつきました。いれたての熱々のカップを舞子が下田先生に手渡す姿が見えましたが、洋一が目を覚ましたことにすぐに気づき、舞子は彼のところへもすぐに持ってきてくれました。「女の子がいてくれるというのはいいものだと思わないかね」と下田先生が話しかけてきたので、洋一はうなずきました。

朝食をすませてすぐ、これからどうするかという相談が始まりま

した。このキャンプは前回、地の裂け目を通って舞子のお父さんと下田先生が降りてきたときに作られたものなのですが、地底へやってきて、湖にぶつかってすぐの場所にあります。だからランプを手に20メートルも歩くだけで、洋一はその割れ目を見上げることができました。岩は垂直に立ちふさがり、まるでビルの側壁のような眺めなのですが、そこにギザギザと稲妻のような形で開いているのです。

割れ目の幅は1メートル以上あり、大人でも楽に入っていくことができます。でもものぞき込んですぐにわかったことですが、内部はひどく急で、岩のデコボコに手足をかけながら、ほとんど垂直に登っていく必要があります。ランプをかざしてもその先を見えることはできませんが、下田先生の話ではこのすぐ上で地下鉄工事が始められ、それ以後一度も足を踏み入れていないので、この割れ目が地上へつながっているのかいないのかは、さっぱり見当がつかないそうでした。

この割れ目をまず下田先生が一人で登ってみることになったのです。地上へ通じているのかどうか、下見をしようということでした。洋一は舞子と一緒に湖に取り残されてしまうことになります。こんなところに置いてけぼりなんて考えただけでぞつとするし、心臓が口から飛び出してしまいそうぐらい不安な気持ちにもなったけれど、下田先生と一緒にあの割れ目を登っていくというのも、あまりうれしい考えではありませんでした。地下鉄工事のおかげで、きつとあの上はふさがってしまっているだろうからです。だから舞子と一緒に残ることに同意したのでした。

用意がととのい、必要な道具類を身につけて、下田先生は割れ目の中へと姿を消してゆきました。はじめのうち洋一と舞子はランプをかざし、下田先生の手元や足元を照らしていましたが、岩のむこ

うにとうとうその姿が見えなくなるとため息をつき、ランプを下ろして湖のそばへと戻ってくるようになりました。

下田先生が帰ってくるまでどのくらいかかるのか、見当もつきませんでした。あるいは帰ってこないかもしれません。洋一と舞子を連れて地上へ帰ることができそうであれば帰ってくるし、下田先生一人がかろうじて地上へ出ることができるといふ状況なのであればそうして、地上の人たちに知らせ、捜索隊が組織される手はずになっていたのです。どちらにしろ、洋一と舞子は湖のそばで待っているしかありませんでした。

午前中はあつという間に過ぎ、お昼になりました。二人だけで昼食をすませました。働くのは舞子だけではなく、洋一も少しは手伝いをすることにしていました。汚れた食器を持って水辺へ降りてゆき、湖につけて洗うのです。食事がすむとランプを片手に持ち、足を滑らせないように注意しながら、岩の斜面をゆっくりと降りていったのです。下田先生が帰ってきたのは、洋一がそうやって2回目の食器洗いを終え、キャンプに戻ってきたときのことでした。岩の割れ目あたりでランプの光が輝くのが目に入ったのです。舞子と一緒にすぐに駆けていったのはいうまでもありません。

下田先生の体は土とほこりで汚れ、とてもくたびれている様子でした。「どうだったの？」舞子が声をかけました。

「ああ」口を開くのもつらそうですが、下田先生は首を縦に振りました。「私たちは地上へ帰ることができるよ。割れ目は一度は完全にふさがってしまったらしいが、湖の水が減ることで地層の崩壊が進み、小さな地震やがけ崩れが起き、コンクリートの壁にひびが入っているを見つけることができた。そこを通って出ることができる」

「本当に？」

「本当さ。だが地上へ帰るのは明日にしよう。今日はもう疲れたよ」

すぐに下田先生をキャンプへつれて戻り、洋一と舞子が食事のしなくを始めたのはもちろんです。ごくごくと飲み、ガツガツ食べ終えたかと思うと、それ以上ほとんど口をきくこともなく、下田先生は毛布にくるまって眠り込んでしまいました。大きなイビキが聞こえ始めたので洋一と舞子は顔を見合わせ、それでもにつこりするこことができました。明日にはみんな地上へ帰ることができるのです。

翌朝、目を覚まして朝食をすませ、3人は順調に旅のしたくをすることができました。キャンプには物が豊富だったし、長い旅になる予定でもなかったのです。できるだけ身軽な装備で、三人はとうとう出発しました。まず岩壁に開いたあの割れ目の中へ入ってゆくのです。手足を突っ張りながら狭い中を昇ってゆくので、洋一はまるで公園のジャングルジムで遊んでいるときのような気がしてくるほどでした。下田先生が先頭で次が舞子、その下を洋一が進んでいました。

垂直に近い登りは1時間ほどで終わることができました。その次はトンネルのような水平の通路が続きます。でもこれが問題なのでした。意地悪でもするように途中でいくつにも分かれ、まるで迷路のようになっているのです。体が魔法でうんと小さくなり、アリの巣の中に迷い込んでしまったような気分がするといってもいいかもしれません。

トンネルは複雑に枝分かれし、途中で行き止まりになったり、また別のトンネルと合流したりして、何が何やらわけがわかりません。

昨日、下田先生はこれを一つずつ探検していったそうでした。だからあんなに時間がかかり、疲れてしまったのです。でも下田先生は正しい道を見つけ、長いロープを伸ばして印をつけていました。ランプで照らしながら、今日はそれをたどってゆけばいいのです。

30分後にはトンネルを抜け出し、三人は別の場所に到達していました。あたりは少し広くなり、でも行く手はコンクリートの壁が通せんぼをしているのです。あまりにも大きく分厚そうな壁なので「これでは通れないよ」と洋一は口に出すところでしたが、よく見るとそのすみにはヒビがあり、大きく口を開けていることに気づいたのです。地下鉄工事が完成した後、地層の崩壊にもなつてできたヒビでしょう。3人はこの中へと入ってゆくことになりました。

でもこのヒビの通路は意外にもとても短く、すぐに通り抜けることができました。そして次はどんな場所に出たと思います？ まぶしくて三人とも思わず顔をおおい、目をしょぼしょぼさせることになりました。いつもと同じはずの太陽の光でも、長い間真っ暗な場所にいた後ではそれほど明るく感じられたでしょう。まわりの様子を見ることができるようになるまで、何秒も待たなくてはなりませんでした。

洋一と舞子は、口をぽかんと開けてしまいました。なんと彼らは、細長く四角い縦穴の底にいたのです。穴は完全に垂直で、寸法はちょうど家のドアほどもあるでしょうか。四角く切り取られて、青い空が真上で輝いています。三人が出てきた穴は、この四角い井戸のような垂直穴の底に口を開けていて、たまたま土が薄っぺらくなつており、光が透けて見えていたので下田先生がけやぶり、道を開いたのです。三人はそこをはい出してきたわけでした。

「ここはどこ？ お線香の匂いがしない？」最初に口を開いたのは

洋一でした。

「そうね」下田先生と一緒に舞子も鼻をひくひくさせ始めています。

「本当だな」下田先生も不思議そうな顔をしています。

穴の深さは２メートルほどなので、見上げながら舞子は言いました。「この上に人がいるみたいよ。話し声が聞こえるわ。何の匂いなのか、その人たちにきいてみましょうよ」

さっそく下田先生が手伝い、舞子を穴の上へと押し上げてやりました。もちろんそこは地上です。花壇か何かがあるらしく、花の匂いも洋一の鼻には届いていました。

ところが舞子は何も言わないのです。まわりの様子を眺め、そのあまりの意外さに呆然としている様子です。続いて下田先生が洋一も押し上げてくれたので、彼もその意味を理解することになりました。周囲をキョロキョロと見回し、舞子と同じようなお愛想笑いを浮かべるしかありませんでした。なんということでしょう。

「君たち、一体どうしたんだ？」と穴の下から声が聞こえるのであわててかがみ、二人は下田先生を引っ張り上げることになりました。その結果、下田先生も困惑したお愛想笑いに加わることになりました。

参列していた人々は、もちろんひどく驚いていたに違いありません。どなたが亡くなったのか知りませんが、そのお葬式の真っ最中だったのです。立派な祭壇が飾られ、みんながお寺に集まり、地面に掘った穴の中へ今しもひつぎを下ろそうとしていたのです。雨ガッパを着てホコリまみれの三人組が突然その穴の中から姿を現した

のだから、びつくりしないはずがありません。お坊さんも葬儀社の人々も参列者たちも口をぽかんと開け、中には手からじゅずを落としてしまっていることに気がついていない人までいます。「やあ、どうも」口をもごもごと動かし、やっと下田先生が言いました。

「お邪魔してすいません」と洋一。

「いいお天気ですね」舞子だけはにっこりし、人々に向かって手を振ることに成功しました。半分走るようにして、すぐさま三人がそそくさとこの場を後にしたことはいうまでもありません。

まるまる二日間も行方不明になっていたのです。家に帰ってから、両親やお姉さんから洋一がどれだけしかられたことか。搜索願が出され、警察まで動き始めていたのです。でも下田先生がとりなしてくれたおかげで、何とか両親も怒りをしずめてくれました。まったく知らなかったことで、聞かされて驚いたのですが、下田先生とはそれぐらい有名な学者だったのです。

舞子の両親や親戚の人々はまだ行方不明のままでした。警察とも相談して、とりあえずということ、舞子は下田先生が自分の家へとつれて帰ることになりました。下田先生はもちろん結婚して奥さんもありましたが、子供がなかったのです。

この少し以前から、東京の町では奇妙な出来事が起こっていました。不気味な地鳴りや小地震が毎日のように続き、人々は不安をつのらせつつあったのです。線路が壊れてしまつて、一部の地下鉄などは電車が走れなくなっていたほどです。だからさつそく下田先生の助言を受け入れて、地下水のくみ上げが中止されました。工場の操業は水道水を使って行われるようになり、水道代がかさんで経営者たちは文句を言いましたが、くみ上げを中止すると同時に地震や地鳴りの回数がぐんと減り、数日たつうちにはまったくなくなつてしまったことも事実なので、しだいに声を小さくし、ついには口をつぐんでしまいました。

こうやって洋一の冒険は終わり、以前と同じ生活が再び始まつたようでした。帰ってきた翌日は家の中で一日休みましたが、その次の日からはまた学校へ通い始めたのです。そのあと何週間かは何事もなく過ぎたのですが、あるとき下田先生から電話がかかつてきて、

洋一は少し驚きました。かかってきたのは昼間で、電話に出たのはお母さんでしたが、学校から帰ってきて洋一は聞かされたのです。「迎えをやったので、すぐに私の家へ来てほしい」というのです。

もちろん洋一はすぐに行く気になりましたし、実を言つととてもうれしかったのです。下田先生の家へ行けば舞子と会うことができるのでから。

いくらもたたないうちに迎えの自動車が姿を見せましたが、ちょうど女学校から帰ってきたところだったお姉さんと一緒に、洋一は口をぽかんと開けることになりました。迎えの自動車というのは、なんと警察のパトカーだったのです。「あんだ、まさか何か悪いことをしたんじゃないでしょうね」洋一をじろりと横目で見ながら、お姉さんが言いました。

もちろん洋一は首を横に振りました。運転していたのは若い警察官でしたが、この人はやさしく親切でした。すぐに乗せられ、洋一が下田先生の家へ向かったのはいうまでもありません。後部座席に座り、洋一はお母さんやお姉さんに向けて手を振りましたが、お母さんはともかく、お姉さんが少しうらやましそうな顔をしていることを洋一が見逃すはずはありませんでした。

パトカーはすぐに下田先生の家の前に着きました。もともとそんなに距離が離れていたわけではないのです。自分でドアを開けて降り、洋一は見上げましたが、いかにも古めかしい大きなお屋敷でした。かなりのお金持ちに違いないし、下田先生はこんな家で生まれ育ったのかと洋一は少しうらやましく思う気持ちになりました。

応接室の中で、下田先生はもう洋一を待っていました。お茶とケーキを置いて下田先生の奥さんはすぐに姿を消してしまいましたが、

下田先生以外にもふたりの人が部屋の中にいました。

一人はもちろん舞子でした。なつかしくてうれしくて、洋一がさつそく隣に腰かけたのはもちろんです。着ている物の他は舞子にも変ったところはなく、元気そうでした。この家での暮らしにすっかりなじんでいるのでしょう。舞子の両親や親戚の人々は今でも行方不明で、おそらく死んだものと思われることは洋一も聞いていました。口にはしないつもりでいました。女の子らしいワンピース姿の舞子を洋一は始めて目にしたので。スカートのすそから見えているひざ小僧はとても白く、かわいらしいものでした。

もう一人の人というのは40歳ぐらいの男で、「これは小林警部という刑事さんだ」とすぐに下田先生が紹介してくれました。茶色い背広を着ていますが、少し小柄で背が低く、柔道や剣道ができそうな感じはあまりしません。こんなおじさんに強盗を捕まえたりできるのかなという気がしましたが、洋一は黙っていることにしました。洋一が腰を落ち着けると、すぐに下田先生は質問を始めました。「洋一君、地底のあの湖で君は何か見なかったかい？」

フォークを手にして、さつそくケーキに突き刺そうとしていましたが、洋一は顔を上げました。「何かって？」

洋一が不思議そうな顔をしているのを見たからでしょう。舞子も言いました。「私も何も見なかったわ。湖の水があつて岩があつてあとは真っ暗なだけよ」

「洋一君も何も見なかったのかい？」小林警部が顔をのぞきこみます。

「うん」

「そうかい。それは困ったな」下田先生と小林警部は黙り込んでしまいました。

「どうかしたの？」

「私もまだ教えてもらってないのよ」舞子が不満そうに口をとがらせました。

下田先生と顔を見合わせ、小林警部はうなずきました。事情を説明する気になったようで、下田先生が話し始めました。「舞子ちゃんも洋一君もいいね。まだ新聞にも載っていないことだから、これは本当に内緒の話なんだよ」

「誰にも話してはいけないことなのね」舞子が言いました。

「そうなんだ。だから洋一君もいいね。おうちの人にも話してはいけないよ。実は最近、東京の地下鉄の駅で人が死ぬという出来事がいくつも続いて起こっているんだ」

「どうして死ぬの？」

「吸血鬼が出たのだという人もいるが私には信じられないな。小林警部、被害者の体から血がすべてなくなっていたわけではないのだから？」

「ええ、でもかなりの量だから失血死には違いありませんが」小林警部は答えました。

「どうして？」洋一も舞子も目をまん丸にしています。

「それがわからないのだよ。夜遅くの電車の利用者で、ひとけのないプラットフォームで電車を待っていたり、下車して薄暗い通路を一人で歩いているときなどに被害にあっている。調べてみると体には小さな穴が開いていてね。ポンプか注射器のようなものでそこから血を吸い出されたのは間違いないようだ」

「怖いわ」舞子がつぶやきます。

「集めた血を犯人は何に使うの？」と言ったのは洋一です。彼の頭の中では、怪奇映画の主人公のような冒険心が頭をもたげ始めていたに違いありません。

「それもさっぱりわからないんだ」小林警部が首を横に振りしました。

「血を集めるなんて、犯人は『力』のようなやつね」舞子がぼつんと言いました。「下水には力が多くて、夏が来るたびに大変だったわ。ボウフラがわいた水たまりやよどみを見つけたたびにお父さんたちは退治していたわ」

「ボウフラって何？」洋一は不思議そうな声を出しました。とたんに舞子があきれたような顔をします。下田先生と小林警部はかすかに微笑むことになりました。

下田先生が説明を始めました。「ボウフラというのは力の幼虫のことだよ。大人になると羽根が生えて、力に変わるんだ。イモムシがチョウになるようなものだね」

「どんな形をしてるの？」

「そうだなあ。手足はなくて頭でつかちのイモムシのような感じで、しっぽには小さな棒が突き出していて、これをボートのオールのように振りながら水の中を泳ぐのだよ」

「力は空を飛ぶのに、ボウフラは水中にいるの？　まるでトンボとヤゴみたいだね」

「そうだね」

ふうんと言ったきり、洋一は黙ってしまいました。小林警部が口を開きます。「犠牲者がもう3人も出ているんだ。何とかしなくちゃならない。東京の下水と地下鉄はあちこちでつながっている。下水はあの地底湖につながっている。だから君たちが何か知らないかと思って質問しているのだよ」

「あの湖って」洋一が顔を上げました。「そのボ……なんだっけ？　ボウフラや力はいないと思うけど、ヘビだったらいると思うよ」

「どうして？」意外そうな顔をして下田先生たちが洋一を見つめたのはいうまでもありません。

「地底湖の水面で、僕はヘビのぬけがらを見つけたもん」

「本当に？　私は知らないわ」舞子が首を横に振ります。

「お皿を洗いに岸边へ降りていったときだよ」洋一は説明を続けました。「水面にプカプカ浮いてた。何だろうと手に取ったから、よく覚えているよ」

「どんなものだった？」下田先生が身を乗り出します。

「脱皮をしたヘビのぬけがらだよ。草むらなんかで見たことがあるでしょ？ 脱ぎ捨てた靴下みたいになって浮いてたよ」

「ウロコがあつたのかい？」

「うん」

「それはどんなやつだった？ 捨ててしまったのかい？」下田先生はがっかりした様子でしたが、洋一はにつこり笑い、ポケットに手を入れようとするではありませんか。洋一が取り出したのは小さなサイフでした。がま口になっていて、パチンと開くことができます。

「ヘビのぬけがらって、サイフの中に入れておくとお金がたまるおまじないになるって言うでしょ。だから……」

洋一はサイフを差し出そうとしたのですが、ひつたくるようになって、もう下田先生はつかみ取っていました。そして中をのぞきこみ、うなり声を上げたのです。額を寄せ、舞子や小林警部ものぞき込むことになりました。それは薄茶色をして、10円玉を2、3枚合わせたぐらいの大きさをしていました。つまみ上げようとする下田先生の指先が震えていることに洋一は気がつきました。小林警部が顔をしかめるので、下田先生はその耳に何かをささやきます。すると小林警部もさつと顔色を変えたではありませんか。すぐに立ち上がり、電話を借りるために小林警部は奥の部屋へと消えてゆきました。

少し震える声で「洋一君、これを少しの間借りてもいいかい？」と下田先生が言うので、「先生にあげるよ」と洋一は答えましたが、この小さな皮のカケラが大人たちに与えたショックの大きさに驚いていました。でも質問するのはなぜかためらわれ、舞子と一緒に口

を閉じているしかなかったのです。

ぬけがらを持って、小林警部はすぐに警視庁へと帰ってゆきました。なんだか知らないけど非常事態なのでしょう。同じパトカーに乗って、下田先生も警視庁へ行ってしまったのです。洋一は歩いて家へ帰ることになりました。でも距離は近く、それほど時間はかかりません。途中までは舞子も一緒に来てくれることになりました。だから洋一にも不満はなく、下田先生の奥さんにあいさつをして、靴をはいて家の外へと出たのでした。

夏の夕暮れはまだ明るく、遠くまではつきりと見ることができました。二人は歩き始めましたが、近道をするために神社の敷地を突っ切ってゆくことにしたのです。大きなおやしろではないのですが、うつそうとした森におおわれています。昼間でも汗をかかないですむような日陰ですから、こんな夕方近くにはさらに薄暗くなっています。そこをまっすぐに突っ切るために、二人は歩いていきました。

まわりがさつと暗くなります。とたんに舞子の目がきらりと光ったような気がして、洋一はどきりとしんではないでいられませんでしたが、舞子は下水で生まれ、暗闇の中で育った子供です。暗い場所のほうがしように合っているのかもしれない。手を引かれながら、洋一はついていきました。

舞子が突然立ち止まったのは、森のちょうど真ん中あたりまで来たころでした。背が高く幹のまっすぐな杉の木が何本も植えられ、二人を囲んでいます。その中で立ち止まったのです。理由がわからなくて洋一はキョロキョロしましたが、舞子は口を開こうとしました。「どうしたの？」と洋一は言おうとしました。舞子がひどく緊張した顔をしていることに気づいたのは、そのときのことでした。

「どうしたの？」かすれた声で、とうとう洋一はささやきました。舞子の顔は普段よりも白く、洋一の手だって強くギュッと握っています。舞子の視線を追いかけて、洋一もそつと目を上げることにになりました。

二人の目の前にも杉の木がありました。その幹に何かがとまっていることに洋一は気がついたのです。それが舞子の足を止めさせ、突然緊張させた原因であることは間違いありませんでした。

力というものは細長い胴体を持ち、まるでチョウチョウ結びをしたりボンのように羽根は斜め後ろに突き出しています。細い足が6本、クモのように長く伸びて体を支えています。体全体に比べて頭はとても小さいけれど、口がつんと前へ飛び出しているので、ヒョットコのお面のような顔です。でもこれらのことを、洋一は昆虫図鑑の絵を見て学んだではありません。力を捕まえてきて、虫メガネで拡大して観察したのでもありません。

この力には虫メガネなんて必要ありませんでした。それほど大きな姿をしていたのです。胴体だけで1メートル、羽根や足も入れれば3メートル近くに違いありません。6本の足を使い、杉の幹にしっかりとしがみついているのです。力は明るい場所を嫌い、この森の中は都合のよい避難場所なのでしょう。何十匹も何百匹も集まっても、力は大きな群れを作って飛ぶことができます。体の大きさは違っても、それはこの力にもある習性だったのでしょう。この森の中にはそれこそ何百匹もいて、木々の下の薄暗さの半分はとまっている力たちのせいだったのだとやっと二人は気がついたのです。

舞子の手がじつとりと汗ばみ始めているのを感じました。でもそれは洋一の手も同じだったに違いありません。目玉を動かし、舞子は逃げ出す方向を探っているようです。むやみに駆け出して、いま

目の前にいるこの群れからは逃げ出せても、別の群れの真つただ中に飛び込んでしまつては意味がないからです。この森はすでにこの力によって占領されていると見るべきなのでしょう。

どういふ種類の力なのか、もちろん二人にはわかりませんでした。体は青に近い黒っぽさですが、目だけは明るい緑色をしています。沈みかけた夕日を受けて、信号機の青ランプのように輝いて見えます。ちょうど自動車のヘッドライトほどの大きさがあるのですが、表面には粒々のように小さな模様が無数についていることに気がつき、洋一はあつと声を上げてしまふところでした。大きさといい形といい、ヘビのウロコの模様とそっくりなのです。

幼虫から大人の力に変わるとき、ヘビと同じように力だつて脱皮をするはずです。そしてそのぬけがらの目玉の部分は、きつとヘビのぬけがらのウロコ模様とそっくりであるに違いありません。それがちぎれて湖の水面をただよっていたのであれば、誰だつてヘビのぬけがらだと思ふことでしょう。これは、人類が過去に一度も目にしたことがない種類の力なのかもしれません。何千年か何万年かあの地底湖ですつと眠りについていたのでしょうか、地層の変動で目を覚まし、地上への通路を見つけ、出てきたのかもしれないと洋一は思いました。

突然強く手を引かれ、洋一はもう少しで転んでしまふところでした。でもなんとか踏んばり、舞子のあとをついて走り始めることができたのです。地下で生きている間に身につけたのか、舞子とはとてもすばしっこい子供でした。日が沈みかけ、偶然にもこの瞬間に、まわりが力のお好みの薄暗さになったということなのかもしれません。背後から羽音が聞こえ始め、洋一は思わずぞつとすることになりました。あの体から発するのだから羽音も同じように大きく、普通の力のようなブーンとはまったく違い、まるで電気力ミソリのよ

うに聞こえるのです。

息を切らせながらも、二人はすでに森を抜け出しかけていました。すぐ外はこの町の商店街にそのままつながつています。夕方の買い物で人がたくさん出ています。

力は人の体温や、吐き出す息の成分を感じ取って刺す相手を探しているのだということは洋一も聞いたことがありました。もちろん最初、力たちは二人を追って森を飛び立ったのでしよう。でも森を飛び出すとすぐ、もっと多くの温かい肉体の存在に気がついたのです。人々が吐き出す息など、通りいっばいに広がるごちそうのかぐわしい匂いであるかのように感じられたに違いありません。

すばしっこいだけでなく、舞子は頭の回転も速い女の子なのでしよう。力たちがもつと大きなごちそうに目を奪われ、自分たちに対する興味を失ったことを一瞬でさとり、走る方向を変えたのです。だから洋一は、力の大群に襲われた町の人々がどういう目にあったのか、目撃することなくすんだわけです。背後の羽音に混じって悲鳴がいくつも上がり、ガタン、ドスンと物が倒れ、ガラスの割れる音などが聞こえてくることには気がついていました。でもその意味を深く考えることなく、舞子に手を引かれるまま走り続けたのです。

狭い路地をジグザグに走り、舞子はどこかを目指しているようでした。見通しの悪い曲がり角にさしかかるたびに一瞬立ち止まり、首を伸ばして、その先に力がないことを確認したのはいうまでもありません。洋一は一度ちらりと振り返ってみたのですが、商店街の上空はまわりよりも一段と暗く、まるで黒い雨雲にすっぽりとおわれているかのような眺めでした。でもあれは雲は雲でも、水蒸気ではなく巨大な力でできた雲なのです。あの町が今はどういうことになっているか、想像することさえ恐ろしいような気持ちがいま

した。

何千どころか、力は何万匹もいるのかもしれませんが。走り続け、とうとう二人は川のそばまでやってくることができました。大きな川ではないけれど川原があり、草がぼうぼうに生えています。でもそこに下水道の入口が大きく口を開けていることを舞子は知っていたのです。お父さんと同じように、舞子の頭の中にも下水道の地図がしっかりと刻み込まれているでしょう。迷ったりためらったりすることなく、洋一を連れてその中へと駆け込んでいったのです。「ここにもあの力があるんじゃないの？」と洋一が心細そうな声を出しました。

「ううん」ポケットからさつと懐中電灯を取り出し、舞子は答えます。「あの力があるのは南部幹線という下水なの。でももうここは北部幹線だから大丈夫よ。あつちとは直接つながっていないわ」

ふうんと答えるひまもなく、洋一は下水のさらに奥へと手を引かれてゆくことになりました。水深は浅いので靴の裏をぬらすだけですんでいますが、ピチャピチャと水音がします。「本当に大丈夫なの？」と何度も口から出かかったけれど、あんまり弱虫だと思われるのもしゃくなので洋一は口を閉じていました。

懐中電灯の光以外は真っ暗な中を歩き続け、舞子は突然あるハシゴを登り始め、もちろん洋一もついていったのですが、すぐに鉄製の大きなドアに行き当たりました。何のドアなのかわからなくて洋一は困ってしまいました。驚いたのはポケットから鍵を取り出し、鍵穴に差し込んで舞子がカチャカチャとドアを開いてしまったことです。下水で暮らす人々は、洋一が想像したこともない秘密をいくつも持っているようでした。

ドアを開くと小さな部屋になっていました。電気関係の施設のようで、太い電気コードがあちこちにぶら下がり、足元にもはいまわっています。かたわらに電話機があることに気がつきましたが、その受話器を持ち上げて舞子が耳に押し当てたとき、洋一がどれほど驚いたことか。電話機には小さなボタンがついていて、誰かと話したいときには、まるでインターホンのように押して相手を呼び出すのでしょうか。舞子の指はもちろんそれをしっかりと押していました。

相手が出るのには1分ほどかかりました。向こうにいるのが誰なのか洋一にはもちろんわかりませんが、静かにしていることにしました。でもこれは彼がしつけのよい子供だったからではなく、あの力を目撃してからというものの、町が襲われたことやこの下水に逃げ込んできたことまで含めて、すべてがまるで夢の中の出来事であるかのように思えていたからです。だから舞子の行動を眺めているのが精一杯で、自分から何かをしようという気にはとてもなれなかったのです。

何をどう言い、どう伝えたのか、舞子の電話は次々とつながえられ、場所から場所へと転送されていったようでした。そして本当に驚くべきことですが、10分もたたないうちに警視庁へとつないでもらうことができたのです。洋一たちがいたのは、地下で下水や電話線の工事をする人たちが地上と連絡を取るために作られた電話ボックスだったのです。ここから出た電話線は地上の工事事務所へとつながり、そこから一般の電話回線へと接続されたわけでした。

警視庁では運良く下田先生が電話口に出てくれました。小林警部やその他の人たちと一緒に会議をしていたそうでした。町を襲っている力のことはもちろん警視庁にも通報がされていました。下田先生の話では東京中の警察官にただに出動命令が出され、それだけではなく自衛隊の出動まで検討されていて、許可を得るために総理

大臣官邸へ向けてたつたいま使者が出発したということでした。

洋一たちが地下へ逃げ込んだ後で、地上では想像を超えた大災害が起こっているようでした。洋一は怪獣映画を見ることが大好きでしたが、その彼でさえ、この瞬間に自分が地上にいないことに感謝しなくなつたほどです。

舞子と下田先生が早口で話し合う内容に、洋一はじつと耳を傾けていました。舞子がどういう作戦を立て、何をしようとしているのか次第にわかってきました。そしてそれはいい作戦であるように彼にも思えたのです。でも下田先生は不賛成で、舞子や洋一のような子供にそんなことを実行させるなどんでもないと考えている様子でした。

しかし他に実行できる人などいないことは明らかでした。力の大群に襲われ、いま地上は大混乱なのです。その地上の人々が今からとりかかっていたのでは、準備ができるのがいつになるかわかったものではありません。それに舞子の両親や親戚の人々がみな行方不明のままでは、東京の地下について舞子ほどうっかりした知識を持つている人はいないに違いありません。事態は一刻を争うのです。ならば舞子と洋一がこのまま地底へ降りてゆくしか方法がないではありませんか。

最後にはとうとう下田先生も納得し、小林警部とともに必要な手配をすることを約束してくれました。計画の細かい部分をもう少し取り決め、舞子はとうとう電話を置いたのです。これから何が始まるのか、洋一もすべてきちんとわかっていたわけではありません。でも舞子のことをすっかり信用していたのです。特に心配は感じていませんでした。

電話機のある部屋を出て、二人はまた下水の中を進み始めました。予備の懐中電灯やロープといったものも部屋には備え付けてあったので、借りてゆくことにしました。今度は水平ではなく、井戸のように垂直になった穴をハシゴをつたってずっと降りてゆくことになりました。どこもかしこもぬれて水が流れているか、しずくがポンボタンとたれるかしています。ときどきはカビやコケが生え、ぬるりとした手触りを感じます。懐中電灯を口にくわえ、舞子が先に立って降りてゆきます。洋一はついてゆきました。

ついにハシゴが終わり、「ここが東京の下水道で一番深い部分よ」と舞子が口を開いたのは何分かつたってからのことでした。

「一番深いって？」

「東京すべての下水の中心として大正時代に作られたものの。だからこんなに太いのよ」懐中電灯を使つて、舞子はぐるりとまわりを照らしてみせました。コンクリートではなくレンガで作られた古めかしいトンネルですが、直径はたしかに大きく、何とかすれば地下鉄電車だつて通すことができるかもしれません。だけど水もなくなからに乾いているのです。

「今は使われていないんだね」洋一は言いました。

「東京中の下水を集めて、海へと一気に流すという計画だったの。でもその後方針が変わって、下水処理場を作ることになったわ。だから今では使われていないけれど、東京の地底をやりのようにまっすぐ貫いているのよ」

「へえ」

「さあ行きましょう」舞子は洋一の手を引いて歩き始めました。広いトンネルの中に二人の足音が響きます。

「これが南部幹線につながっているの？ どのくらい先？」

「数キロというところだわ」答えながら懐中電灯を使って、舞子はちらりと腕時計をのぞき込みました。「あと1時間以内に仕事を終えないといけないのね」

二人は歩き続けました。天井が高く、左右も広々として、まるで巨人の国へでも迷い込んだかのような気持ちになります。退屈なので歌でも歌ってみようかと洋一は口を開きかけましたが、あまりにも大きくわんわんと響いてまるで自分の声ではないかのように聞こえて恐ろしくなり、すぐにやめてしまいました。

二人はついに終点につきました。レンガのトンネルが目の前で終わってしまったのです。突然立ちふさがった壁に、洋一は口をぽかんと開けることになりました。「ここまで工事が進んだところで計画が変更されてしまったのよ」舞子が言いました。

「ここから先へはもう進むことができないの？」

「できるわ。そこを見て」舞子は洋一の足元を指さしています。まるでネズミの穴のようにして、そこに小さなドアがあるではありませんか。もちろん本当にネズミしか通ることができないほど小さいというのではなく、はって行けば大人でも入ることができるでしょう。

「これは何の穴なの？」洋一が不思議に思ったのも無理はないかもしれません。

「その先は別の下水道へつながっているわ。でもそのドアを過ぎるともう南部幹線なの。あの力たちがいる場所だわ。私たちはその小さなドア一つで仕切られているのよ」舞子が説明してくれました。

「あの力ではこの穴を通り抜けることはできないと思うな」

「そうね」

「このドアをどうするの？」

「開くのよ」舞子はもう一度腕時計をのぞき込みました。「もうあまり時間がないわ」

二人はすぐに仕事に取りかかりました。腕時計によると今は夜の8時で、8時15分には油の注入を始めるように下田先生に頼んであったのです。あと15分しかありません。

「間に合うの？ 時間までにこのドアを開くことができる？」洋一が不安そうな声を出しました。

「大丈夫よ。このドアには鍵なんてついてないもの」懐中電灯を近づけ、かがんで舞子は調べ始めています。「カンヌキがあるだけよ。このレバーを動かすことができれば、ドアは開くわ」

でもそのレバーがなかなか動かないのです。大正時代から誰も手を触れていないのだから仕方がないのかもしれませんが、二人で力を合わせ、全身の筋肉を動員してしがみついても、がんとして動こうとしないのです。

「困ったわ」

「8時15分になっちゃったよ」

「あれが聞こえる？」不意に舞子が鋭く言ったので口を閉じ、洋一は耳をすませました。そしてそれは、すぐに彼の耳にも届くことになりました。でも彼を怖がらせるような大きな音ではなかったのです。ピチャピチャとかポタポタという水漏れのような音なのです。

下田先生や警察の人たちがどのくらいの量の油をどのくらいのペースで下水へと流し込んだのか、もちろん二人は知りませんでした。でもあの地底湖の水面をすべておおてしまおうというのです。大型トラック何台分もの量だったことは間違いないでしょう。8時15分に注入が始まり、下水をどうどうと下り、その先端がついに二人のいるところまで達したということなのでしょう。いったんは顔を見合わせましたが、すぐに舞子は顔を輝かせました。「これでこのドアを開くことができるわ」

「どうして？」

「見てごらん。とうとうここまでやってきたわ」

舞子が指さすので振り返り、洋一はあつと小さな声を上げました。からからのトンネルの床を薄い膜のようにぬらしながら、油がこちらへとやってくるのです。もちろん深さは1センチもありません。まるで冬の日に長く伸びる影のように、ゆっくりだがしつかりと進んでくるのです。

「洋一君はそこにいればいいわ」トンネルのはしには歩道のように一段高くなった場所があり、舞子がそれを指さすので、洋一は言わ

れたとおりにしました。高さが20センチもないようなのですが、その上にいれば靴をぬらしてしまうことはないでしょう。

油があと10メートルほどのところまで迫ると舞子は駆け出し、かがんでその中に手をつけるではありませんか。あれでは指も手のひらも油だらけになったに違いありません。でも舞子はすぐに戻ってきて、その油を動きの悪いレバーの根元になすりつけ始めたのです。さび付いたつなぎ目に油が回り、あっという間に自由に動くようになりました。カンヌキを外し、舞子がすぐにドアを開いたのはいうまでもありません。

このころには油の先端は二人のすぐそばまでやってきていました。洋一と同じように舞子も一段高い壇の上にあがり、油がドアへと差しかかる様子を眺めはじめたのです。

「このあとはどうなるの？」ドアをくぐり抜けて油が向こう側へと流れ込んでゆくのを確認して舞子が満足そうにうなずいたとき、洋一は口を開きました。

「油はこのまま南部幹線に流れ込んで、割れ目を通ってずっと下へと落ちていって、最後は地底湖に達するわ」

「それから？」

油で汚れていないほうの手で洋一の手を引き、舞子は歩き始めました。もと来た方向へと帰るのです。少し早足なのは、あたりが油の匂いで満ちているから無理もないことかもしれません。「下田先生が言っていたでしょう？ ボウフラはしっぽの先に小さなパイプを持っていて、それを水の上に突き出して呼吸しているの。その水面がすべて油の膜でおおわれてしまうのよ。息ができなくて死んで

しまつわ。あの湖にいたい何千匹住んでいるのかは知らないけれど、間違いなく全滅すると思う」

「へえ」

やがて二人は、垂直に立っている鉄製のハシゴのところまでやってきました。さっき地上から降りてくるときに使ったものです。「さあ地上へ帰りましょう」舞子が言いました。

うんと答えたかったけれど、洋一は返事をする事ができませんでした。背後から突然大きな音が聞こえ、ぎくりとして思わず振り返ることになったのです。

驚いているのは舞子も同じでした。すぐに二人は懐中電灯の光を向けましたが、何も見ることはできませんでした。真っ暗なトンネルがどこまでも長く続き、懐中電灯の光ではとても届かないのです。巨大な怪獣が大きく口を開けている姿のように思えて、突然洋一はこのトンネル全体がひどく恐ろしく感じられてきました。でも音はすぐにやみ、それ以後はもう何も聞こえてくることはありませんでした。空耳ではないにしろ、ただの小規模な崩壊だったのかもしれませんが。ならば気にしていても仕方がないではありませんか。

「さあ行きましょう」懐中電灯を口にくわえ、舞子が先にハシゴを上がり始めました。洋一もついていきます。

油はこれとは別の縦穴を通って降りてきていたのでハシゴはぬれておらず、二人はスムーズに登ってゆくことができました。管のうちに狭い中に二人の足音だけが響いています。まるで雨どいの中にまぎれ込んだネズミになったような気分です。でも二人が順調に登ってゆくことができたのは、ほんの10メートルほどのことでした。

ありませんでした。あるところまでくると、突然舞子の動きが止まってしまうたのです。

「どうしたの？」

洋一は声をかけましたが、舞子は答えてくれません。舞子の足は動くのをやめたまま、ピクリともしないのです。

「どうしたの？」洋一はもう一度言いましたが、やはり返事はないのです。

これだから女の子はと内心思いながら、洋一はポケットから懐中電灯を取り出しました。苦勞して片手でスイッチを入れ、上へと向けたのです。ハシゴは長く、この先も何十メートルと続いています。縦穴の直径は小さく、マンホールを少し大きくしたぐらいで、腕を伸ばすと左右にいくらも余裕はありません。その中で光を向け、何が舞子の足を止めさせたのか、洋一は調べようとしたのです。

こんなに奇妙な物を、洋一はそれまで一度も見たことがありませんでした。想像したことだってありませんでした。あの怪物のことをどう表現すればよいのか、私にもよくわかりません。力にだってもちろんオスとメスがありますが、この二種類が交尾をして卵を生むわけですが、ただどあの力のオスとメスの上にはさらに別の生物がいるなど、誰ひとり知らなかったことなのでしょう。アリやハチには女王がいますが、それに似たものかもしれません。

このときハシゴの途中で二人を待ち構えていたのは、この女王だったのです。『力の女王』と呼ぶべきかもしれませんが。地上で人々を襲っているあの力たちよりもさらに大きく、卵をたくさん作り、たくわえることができるようにでしょう。おなかの部分が特に大き

く長く、その形から小学校の給食で出されるパンのことを洋一は連想しました。でももちろん大きさはその何十倍もあるのです。その両脇に点々と開いている小さな穴は、呼吸をするための空気孔かもしれません。

胸や頭もおなかに合わせたサイズで、そんなものがよくこんな狭い穴の中に入ってこれたものだという気がしますが、羽根と足はコンパクトに折りたたまれ、とても小さくなっています。もしいっぱいに伸ばせば、空軍の戦闘機ほどのサイズになるかもしれません。

こんなものを目の前にしたら、舞子でなくても足が止まってしまふに違いありません。まるで凍りついたかのように、洋一も体を動かすことができなくなってしまうましたが、舞子の声がかすかに耳に届いたのはこのときのことでした。

「5、4、3…」

どうやら舞子は数を逆に数えているようです。どういう意味だろうと洋一は思いましたが、すぐにわかりました。舞子のようにすばしっこい子がこういう場合に考えることなど、一つしかないではありませんか。

「…2、1…」舞子は数え続けます。

『0』という言葉が口を離れるのと同時に、二人はハシゴの段から足を外したのです。両手の力もゆるめ、でもハシゴから完全に離れてしまうことはせず、電車のレールのようになった二本の縦棒に軽くそわせるようにしたのです。重力に引かれ、二人は石ころのように下へと落ちていきました。

もちろんそれは本物の落下ではありませんでした。両手をうまく使い、ブレーキをかけながら落ちていったのです。だから二人とも大きくしりもちをついたけれど、床の上に立つことができました。あの大正時代のトンネルに逆戻りしてしまったわけです。

舞子のおしりが落っこちてくるところか、洋一はまるつきり上に座られる形になってしまったのですが、文句を言っている余裕などもちろんありません。二人はさっと走り始めたのです。駆けてゆく方向を決めたのは舞子でした。さっきの小さなドアがある方向へと洋一は行きかけたのですが、舞子に強く手を引かれ、逆を向くことになったのです。さっきとは反対の方向、北へ向かって二人は走り始めたわけでした。

その方向に何があるのか、洋一には見当もつきませんでした。でも舞子は知っているのに違いなし、逆らう理由もなかったのです。広く天井の高いトンネルの中に、二人の足音がパタパタと響きます。

もちろん力の女王は、二人を黙って見送ったりはしませんでした。6本の足をフルに使い、頭が下を向いた姿勢のまま縦穴を駆け下りてきたのです。二人が手をつないで走り始めた数秒後には、女王はトンネルの床に着地していました。でも一足ちがいで二人は背中を見せていたのです。女王は腹を立てたに違いありません。さっと広げ、羽根を左右に伸ばしたのです。それこそ本当に飛行機のような姿とサイズですが、いくら大きなトンネルといっても左右にあまり余裕はありません。まるで機械仕掛けのようにこの羽根がすぐに振動を始めたのはいうまでもありません。

怖さを感じながらも好奇心には勝てず、走りながら洋一はちらちらと後ろを振り返っていました。女王の姿は巨大で恐ろしく、でも美しくもあり、緑色の瞳は常識はずれに大きい宝石のように輝いて

います。アンテナのような形のヒゲはやわらかなカーブを描き、ドレス姿の若い娘のように優雅なのです。自分が心のどこかで魅了されてしまっていることを洋一は感じないではいられませんでした。この魅力はそれほど大きく強いものだだったので、何かの拍子に立ち止まるようなことがあれば、そのまま女王の手にかかることを洋一は承知してしまっただけかもしれません。

でも舞子はそんなことなどみじんも感じていないようでした。男の子と女の子の違いかもしれません。彼女もときどき振り返ってはいましたが、それは単に敵との距離を知るためであり、女王の美しさなどまったく気にも留めていなかったでしょう。

「どこまで走ればいいの？」とうとう洋一も息が切れてきました。

「もう少しよ」と舞子は答えますが、彼女も息を切らせ始めているようです。ただ女王は違います。彼女の羽音に変化はなく、二人のあとをびったりとついてくるのです。もちろんもつと速く飛ぶことだってできるに違いありません。でもそうしないのは、へたをして羽根が壁に触れてしまうことを警戒しているからでしょう。そんな危険をおかさなくても、いずれ洋一たちは走り疲れてしまつに違いありません。それを待てばよいのです。

でも状況の変化は、二人が疲れ切つてしまふ前に訪れました。二人はもちろん懐中電灯で前方を照らしながら走っていました。その光の中に、やがて奇妙なものが見えてきたのです。まるでカーテンのような形をして、下水道の天井から床へ向かつてさえぎるようについているのです。

何のことやら洋一には意味がわかりませんでした。舞子は予想していたようです。走る速さをゆるめることもありません。手を引

かれるまま、洋一も近づいてゆくほかありませんでした。

カーテンのように見えるものの正体を、くぐり抜ける瞬間に洋一は知ることになりました。なんと縦穴を通って地上から降りてくる油だったのです。どこかしら黄色がかった見たのはそれが理由でした。大量の油ですから、どろどろと全部が地底まで落ちきるには何分間も、もしかしたら何時間もかかってしまうのかもしれない。

そうやって小さな滝のように降ってくる油の下を二人はくぐり抜けたのです。もちろん全身が油だらけになってしまいました。でも立ち止まって振り返り、二人とも思わずにんまり笑わないではいられません。女王はこの油をくぐり抜けることができないのです。滝の前で停止し、こちらを見ているだけです。羽根を油でぬらすわけには絶対にいけないでしょう。そんなことをしたら飛べなくなってしまう。

かといって、油が流れている床に着陸することもできません。油が体につくことを力はひどく嫌うのかもしれない。だから女王は油の滝の手前でじつと動かず、まるでヘリコプターのように空中にとどまり続けるしかなかったのです。

二人は床の上に座ることにしました。トンネルの床はゆるい坂になり、南へ向かって下ってゆくのです。二人のいる側には油はなく、床はからからに乾いています。そうやって、二人は油の向こうにいる女王の姿を見上げるようになりました。「あの力は怒っているかしら？」舞子が口を開きました。

「たぶんね」と洋一。「どうやって僕たちをやっつけてやろうかと、そのことだけで頭がいっぱいだと思うよ」

「でも油の滝を越えてくることはできないのね」

「だけど油の流れが止まってしまったらどうするの？　ここから地上へ出る出口はあのハシゴしかないの？」

「他にはないわ。私たちはどうしてもあそこへ戻らなくちゃならないのよ」

「どうやって？」

「それを考えていたの。ねえ洋一君は……」

「しいっ」そのとき洋一が鋭く言ったのです。彼が遠くへ目をこらし始めていることに舞子もすぐに気がつきました。女王の背後のずつとむこう、二人が最初にやってきたあたりです。

「どうしたの？」舞子が言いました。

「いまあそこで何か光が見えたような気がしたよ。懐中電灯のような小さな光。ほら……」

思わず二人は立ち上がってしまいました。あの場所にはたしかに光が見えているのです。「下田先生たちが来てくれたんだわ」舞子が声を上げました。

それはたしかに懐中電灯の光に違いありませんでした。それも一つや二つではありません。油を流し込む作業を終え、洋一たちを助け出すために地上から降りてきてくれたのでしょ

新たな敵の出現には、女王もすぐに気がついたようです。羽根を

壁に触れさせないように注意しながら、体の向きを慎重に変え始めたではありませんか。天井から糸でつるされた千羽鶴がそよ風に吹かれて向きを変えるときの様子に似ていなくもありません。そんな光景を洋一は連想していたのですが、この千羽鶴は自動車よりも大きいのです。

新たな敵に向かって、女王は先制攻撃をかける気になったのかも知れません。二人のそばをさっと離れてゆきました。羽根を力いっぱい動かしているのでしょうか。電気カミソリのような音がトンネルの中いっばいに響きます。

舞子と洋一は、女王の最期を目撃することはありませんでした。何秒かたつて女王が救出隊のあたりにまで行き着いたとき、トンネルの中を稲妻のような青い光がいくつも走るのが見えたのです。暗さに慣れた二人には目がくらむほどまぶしく感じられました。それが何の光なのかはすぐにわかりました。何分の1秒か遅れてでしたが、バンバンバンという銃声が耳に届いたのです。トンネルの中に反響し、耳をおおいたくなるほど大きく聞こえました。だけど、それが女王の最期だったのです。

二人を迎えに来てくれたのは下田先生と小林警部で、もちろん小林警部は数人の警察官を引き連れていました。この人たちが銃を取り出し、とつさに引き金を引いたのです。いくら巨大な女王でも、弾丸の前にはひとたまりもありませんでした。一瞬で墜落し、絶命したのです。

二人がすぐに助け出され、安全に地上へと連れ戻されたのはいうまでもありません。気を張って洋一は元気なふりを続けていましたが、やはり女の子ということかもしれません。下田先生の顔を見たとなん、舞子はわあわあと泣き出してしまったのです。洋一の前で

ここまでは無理をして、相当がんばっていたのでしょうか。でもその糸が切れてしまったのです。

あまりに泣きじゃくるものだから、舞子は下田先生が抱き上げて運んでやらなくてはなりませんでした。全員が歩き始め、ハシゴのところへと戻るようになりました。すると当然、女王の死体のすぐわきを通ることになります。こわごとではなく、好奇心を持って洋一は眺めました。下田先生の腕の中で顔をそむけ、舞子は見ようとはしませんでした。目を見張っている洋一の様子に気がついたのでしょうか。懐中電灯を向け、小林警部が照らしてくれました。「その羽根のところ。ほら…」洋一はつぶやきました。

みんなが立ち止まり、女王のまわりに集まることになりました。懐中電灯の光が集まると、さらにはつきりとわかるようになりました。女王の羽根の先端あたりなのですが、文字か数字が書かれているように見えるのです。かがみこんで顔を近づけ、洋一は納得することができました。これはたしかに文字です。薬品を使って焼きこんだらしく、長い年月のせいで消えかかっていますが、読むことができました。いったい誰のしわざなのか、奇妙なことに『イの41』と書かれているのです。

「これは何？ イの41ってどういうこと？」洋一が疑問に思ったのも当然でしょう。やっと涙がおさまりかけた舞子の背中をそつとなでてやっていましたが、下田先生が答えてくれました。

「イとは『力科』の実験体という意味さ。41とは『41番目の株』をさしている」

「力科って？」

「要するに力の仲間ということだよ。その他にハエとハチでも実験を行っていて、それぞれ『ロ』、『ハ』と呼ばれていた」

「でも結局、陸軍の兵器研究所で開発に成功したのは『イの41』だけだったそうですね」小林警部が言いました。

「そうさ」と下田先生。「だがすでに遅く、第二次世界大戦は終わりにかけていた。明日にも上陸してくるアメリカ軍に渡すわけにはいかず、『イの41』の試作品はすべて廃棄されることになった。だから下水に流したのさ。地下で生き続け、巨大に成長し、繁殖までするとは誰も想像しなかった。それが地底湖に流れ込み、ずっと眠りについていたのだらう。その後、地下水のくみあげが進み、地層の崩壊が始まり、栄養のある水が下水から大量に流れ込み……」

「今日にいたったというわけですね」小林警部がため息をつきました。

「そういうことさ」と下田先生は締めくくりましたが、洋一や舞子、他の警察官たちは目を丸くしたまま、何を言っているかわからない様子です。突然、女王の前で小林警部がかがみました。いつの間に取り出したのか、その手には小さなハサミが握られているではありませんか。そして小林警部は、番号が刻まれた羽根の部分そのハサミでちよきちよきと切り取り始めたのです。羽根は分厚く、少し苦労しているようでしたが、とうとう切り離すことができました。それをハサミと一緒にポケットにしまったのです。

「やはりそうするのかね？」低い声で下田先生が言いました。

少し後ろめたそうに、小林警部は首をたてに振りました。「証拠はきちんと隠滅しておけと上司から命令を受けています。戦争中の

ことが原因とはいえ、今回の災害が人災であることは絶対に隠さねばならないとかで。私も寝ざめが悪いのですがね。でも私のような下っぱは命令に逆らえんのですよ」

油でぬれた床に女王の死体は長々と横たわっています。まるで翼を折られて墜落した飛行機のような姿で、ハシゴへ向かって歩きはじめながら洋一は何度も振り返ったのですが、そのたびに彼女のことがかわいそうに感じられなかったわけではありません。流れてゆく油が、女王の涙であるかのように洋一には思えたのです。

またまた両親とお姉さんからひどく怒られ、それでも何日かがち、洋一はまた以前と同じように学校へと通うようになりました。地上を襲った力たちもすっかり退治され、姿を見せなくなっていました。そして油作戦も成功だったのでしょう。その後何年たっても力たちが現れることは二度とありませんでした。舞子はそのまま下田先生の子供になりました。両親や親戚の人たちは結局ひとりも見つからなかったのです。

洋一の学校へ転校生がやってきました。気をきかせた下田先生が手続きをして、同じ学校へ舞子が入学できるようにしてくれたのです。舞子はそれまで学校へ行ったことは一度もなかったのですが、両親から教えられ、ちゃんと字を読んだり計算をしたりすることができました。下水道の中で長く暮らし、どんなに複雑な迷路でも一瞬で暗記する力を持っているおかげなのか、ジグソーパズルなどはどんなに複雑なものでもあつという間に解いてしまうので、同級生たちも目を丸くするほどだったのです。

互いの家が遠くはないので、洋一と舞子はいつも一緒に登校し、下校もランドセルを並べてするようになりました。顔を見ても話をしても、舞子が下水道で生まれ育った女の子だとは、もはや誰も想像もしないことでしょう。たまに洋一が寝坊をして、学校に遅刻してしまいそうときにはやむを得ず『近道』をすることはありますが、下水道や東京の地下世界とそれ以上のかかわりを持つことは、舞子はその後二度となかったのです。

（終）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2546h/>

地下迷宮の怪物

2011年11月11日07時46分発行